一般社団法人　日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第30号（通巻第58号）

体育心理学専門領域

2018年7月発行

体育心理学専門領域会則

第1条　本会は、体育心理学専門領域と称する。
第2条　本会は、体育・スポーツ心理学研究の発展のため、会員の研究発表の場を提供するとともに他の研究領域と融合した企画を推進し、会員の研究と実践の促進に寄与することを目的とする。
第3条　本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
(1) 研究会の開催
(2) 会報の発行
(3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
(4) その他、本会の目的に資する事業
第4条　本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
第5条　本会に次の役員を置く。
(1) 会長1名
(2) 理事12名
(3) 監事2名
第6条　役員の選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
(1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
(2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に会員の中から庶務・会計を担当する理事2名を会長が委嘱することができる。
(3) 理事長は、理事の互選によって選出する。
(4) 事務局は理事長および庶務・会計担当理事で構成する。
(5) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
第7条　会長および理事の任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、理事の2期目に理事長に選出された場合は3期を重任限度とする。
第8条　本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
第9条　理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
第10条　会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
第11条　本会の会議は、総会および理事会とする。
第12条　総会は、次の事項を審議決定する。
(1) 役員の選出
(2) 事業報告および収支決算
(3) 事業計画および収支予算
(4) 会則の改正
(5) その他
第13条　総会は年1回、日本体育学会大会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
第14条　本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
第15条　本会の会費年度は、4月1日より翌年の3月31日までとする。
第16条　本会の住所は事務局と同じとする。事務局の住所は別紙に定める。

附則　1．本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
2．本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
3．平成24年4月1日より、日本体育学会が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称し、本会則の名称を「体育心理学専門領域会則」と改称する。
この会則は、平成21年8月27日から施行する。
この改正会則は、平成29年9月10日から施行する。

事務局所在地　東京都目黒区駒場3-8-1　東京大学大学院総合文化研究科　工藤和俊研究室
事務局担当　工藤和俊

体育心理学専門領域の役員

任　期：平成29年4月1日～平成31年3月31日
会　長：阿江美恵子
理事長：工藤和俊
理　事：学会大会委員会　○佐々木万丈、菅生貴之、山本裕二
企画委員会　○北村勝朗、磯貝浩久、東山明子
広報委員会　○兄井　彰、荒井弘和、荒木香織
庶務・会計委員会　國部雅大（庶務担当）、奥村基生（会計担当）　○委員長
監　事：木島章文、田中美吏
幹　事：鈴木啓央

一般社団法人　日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第30号（通巻第58号）

体育心理学専門領域

2018年7月発行

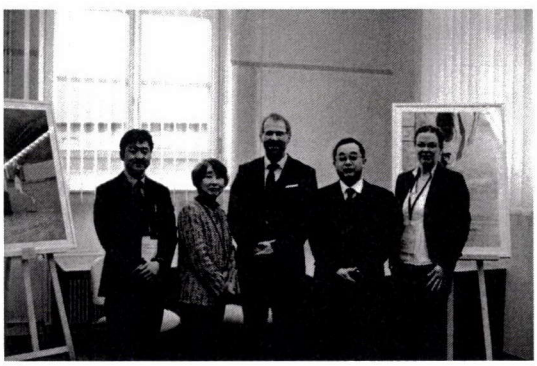
巻頭言

体育心理学専門領域会長　阿江美恵子

第10回ドイツ－日本シンポジウムが2018年3月13日～15日にドイツのミュンスター大学（ミュンスター市）で開催されました。第二次世界大戦後ドイツは東西に分かれ、社会主義国の東ドイツはスポーツで異様な強さを誇っていました。保健体育教員免許の必修科目になっている「運動学」は東ドイツのマイネルの考え方に端を発しています。

今回はスポーツ心理の研究をというドイツからの要望で、理事長の工藤和俊先生と阿江がキーノートを担当しました。自分の研究発表だけとは違う貴重な体験をすることができました。筑波大学で外国人教師をつとめられたタイペル先生（市村操一編著・ディーター・タイペル共著、トップアスリーツのための心理学、同文書院、1993）もお元気に参加されました。近年、外国語の履修が英語だけの学生が増え、ドイツ語を理解する学生が減っているように感じます。英語圏の発想とまた違うドイツとの交流は大切だと感じました。

ミュンスター市は平坦で自転車が一番多い街だそうです。学生の大変多い町で、歩道の横の自転車専用レーンをすごいスピードで自転車が行き交い、外国人はオタオタしました。電車にも自転車ごと乗ることができます。町は古い建物が観光名所になっていましたが、実は第二次世界大戦ですべて破壊されたそうです。それを執念で復元、ナチス時代の写真なども市歴史館に展示されていました。



ドイツスポーツ科学会会長と



古めかしく見える街並

国際的な視野はどうしたら身につくでしょうか。ユーロ内の大学は自由に交流ができ、英語を学ぶことが簡単にできるとのことです。それでもドイツ語だけで発表される方もいるので、言葉の壁は考えるよりも高くないと思います。

回数にすれば私は国際学会によく参加していると思います。中国の武漢体育大学でのアジア南太平洋スポーツ心理学会（ASPASP）で似たテーマで発表をした学生さんや大学関係者と話をしました。その中のお一人がISSPの前会長、昨年のスペインのISSPでそのとき学生さんだった方に久々にお目にかかりました。結婚もされて立派な先生になっていました。

今年の専門領域の企画はオーストラリアの先生をお呼びしています。ぜひ少しでも質問をして、生の考え方に触れてみてください。

今期で会長任期が終了します。組織改編を考えていますので、お考えいただくことがたくさんあると思いますが、どうかよろしくご協力をお願い致します。

体育心理学専門領域会報　第30号
目　次

巻頭言 …… i

目次 …… ii

Ⅰ．日本体育学会第68回大会関連

1．プレセミナー

題　　名：ゴルフのメンタルを経験して指導に活かす！

実施報告：北村勝朗（日本大学） …… 1

講　　師：菅生貴之（大阪体育大学） …… 2

講　　師：平木貴子（日本大学） …… 2

参 加 記：伊藤詩織（東北大学大学院） …… 3

2．キーノートレクチャー1

題　名：協応秩序の切替えにみられる体育 - 徳育融合のかたち

司　会：山本裕二（名古屋大学） …… 4

演　者：木島章文（山梨大学） …… 5

傍聴記：増澤拓也（琉球大学） …… 6

3．キーノートレクチャー2

題　名：身体の動きの語りとこころ

司　会：武田大輔（東海大学） …… 7

演　者：鈴木　壯（中部学院大学） …… 8

傍聴記：浅野　遼（東海大学大学院） …… 9

4．シンポジウム

題　名：アスリート・ファーストがもたらした光と影

司　会：土屋裕睦（大阪体育大学） …… 10

演　者：渋倉崇行（桐蔭横浜大学） …… 11

これからの時代に求められる青少年スポーツ指導者

演　者：煙山千尋（岐阜聖徳学園大学） …… 12

女性アスリートに潜む健康問題

演　者：荒木香織（園田学園女子大学） …… 13

真のアスリート・ファーストコーチングをめざして

傍聴記：奥野真由（久留米大学） …… 15

5．口頭発表（座長報告）

座　長：横山慶子（名古屋大学） …… 16

座　長：荒井弘和（法政大学） …… 17

座　長：平田智秋（十文字学園女子大学）…… 18
座　長：伊藤友記（九州共立大学）…… 19
座　長：渋倉崇行（桐蔭横浜大学）…… 20

6．ポスター発表記
発表者 1：谷木龍男（清和大学）…… 21
発表者 2：長谷川弓子（岩手大学）…… 22

7．大会参加記
大会参加記：幾留沙智（鹿屋体育大学）…… 23

8．学会発表支援金採択者　大会参加記
日本体育学会に参加して：下窪拓也（筑波大学大学院）…… 24
日本体育学会に参加して：梶内大輝（法政大学大学院）…… 25
日本体育学会に参加して：上田遥菜（奈良女子大学大学院）…… 26
日本体育学会に参加して：村川大輔（鹿屋体育大学大学院）…… 27
日本体育学会に参加して：前田凌汰（大阪体育大学大学院）…… 28
日本体育学会に参加して：藪中佑樹（大阪体育大学大学院）…… 29

Ⅱ．研究会の活動報告
スポーツ社会心理学研究会：杉山佳生（九州大学）…… 30
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会：高妻容一（東海大学）…… 31
運動学習研究会：奥村基生（東京学芸大学）…… 32
臨床スポーツ心理学研究会：中込四郎（国士舘大学）…… 33
スポーツ動機づけ研究会：藤田勉（鹿児島大学）…… 34

Ⅲ．研究室紹介
研究室紹介：樋口貴広、福原和伸、井村祥子（首都大学東京）…… 35

Ⅳ．学位論文紹介
内田遼介（法政大学）…… 39
小川茜（西日本短期大学）…… 41
實宝希祥（大阪体育大学）…… 43
杉山真人（神戸親和女子大学）…… 45
山越章平（聖泉大学）…… 47
髙橋正則（日本大学）…… 49

Ⅴ．海外情報
福原和伸（首都大学東京）…… 51

Ⅵ．日本体育学会第 69 回大会関連
日本体育学会第 69 回大会案内 …… 54

Ⅶ. 事務局報告

平成 29 年度体育心理学専門領域　第 1 回理事会 議事録 …… 56
平成 29 年度体育心理学専門領域　第 2 回理事会 議事録 …… 59
平成 29 年度体育心理学専門領域　総会議事録 …… 61
平成 30 年度体育心理学専門領域　第 1 回理事会 議事録 …… 64

資料 1　平成 29 年度決算報告書 …… 67
資料 2　平成 30 年度補正予算案 …… 68

編集後記

Ⅰ．日本体育学会　第68回大会関連

プレセミナー

実施報告

北村勝朗（日本大学）
磯貝浩久（九州産業大学）
東山明子（大阪商業大学）

学会大会前日の９月７日（木）に企画されたプレセミナーは、「ゴルフのメンタルを経験して指導に活かす！」のテーマで実施された。このプレセミナーは、メンタルなスポーツと言われるゴルフを題材とし、実際にプレーをする中で心理的な場面を経験し、その経験を指導に活かすための方策を探るという趣旨で企画された。具体的には下記３点の意義が込められている。

1. 心理的体験の現場（フィールド）において、生でリアルタイムな体験を素材としたリフレクションが行われること
2. そうしたリフレクションを学校教育等の体育スポーツの指導現場に応用するための手がかりが得られること
3. プレー中の他者の心理的変化、及び指導助言による認知・行動の変化を観察することで、メタな視点で指導現場を捉え、指導実践に応用し得ること

当日は、静岡市内の大谷ゴルフ場のショートコース18ホールのラウンドを、大阪体育大学の菅生貴之先生と日本大学の平木貴子先生お二人の講師によるメンタルの側面からのアドバイスを受けながらプレーを行った。天候にも恵まれ、10名の参加者が２グループに分かれて各自が自身のプレーや心理的課題に集中して取り組んだ。会場の大谷ゴルフコースはテーマにぴったりの、池あり、崖あり、藪ありの興味深いコースで、参加者は、ほぼ全てのホールで心理的課題に直面しながらプレーを行った。

参加者からの感想として、「他の人の心理的変化を実際のプレーの中で間近で観察することができ、今後の指導実践の参考になった」、「講師の方のアドバイスが的確で、自分の認知特性や行動の特徴を再認識することができた」、「プレー後の反省会を通して、講師の方々からたくさんの助言をいただき、今後の指導実践のヒントをいただけた」といったものが出されている。

また講師のお二人からは、「自分の持ち球によって距離感(落としどころ)をイメージした方が良い」、「得た情報をどのように活用するか、取捨選択も必要」、「状況によってルーティンそのものが変化していることがある」、「失敗や成功での感情の変化を感じて、自分自身と対話することが必要」といった助言と感想が出されている。

上記のような成果は認められるものの、今後はプレセミナーの更なる充実に向けて、実施内容や実施方法の再検討、開催日程や開催日時の再検討も課題として残された。会員の方々の研修、研鑽の場として何が可能か、次年度に向けて検討を進めたい。





講師報告

平木貴子（日本大学）
菅生貴之（大阪体育大学）

今回のプレセミナーでは「ゴルフのメンタルを経験して指導に活かす！」というテーマのもと、大阪体育大学の菅生貴之先生とともに講師を務めさせていただきました。参加者は10名で、初心者からティーチングプロをしておられる方まで幅広いレベルの方々が参加されていました。2組に分かれてのプレーでしたが、菅生先生と私がそれぞれの組につき、途中で菅生先生と交代することで講師が全ての参加者とラウンドできるように組み合わせを行いました。雨が心配されましたが、途中小雨がパラつく程度で、無事18ホールラウンドすることができました。

プレー中はプレセミナーの趣旨である「実際にゴルフをプレーする中で心理的な場面を経験し、その経験を指導に活かすための方策を探る」ための題材となるよう、できるだけ参加者が自分の体験を味わえるよう気を配りながらラウンドしました。具体的には、参加者の自発的な発言や問いかけに基づいてアドバイスを行い、ラウンド中に見受けられたスイングやストロークのテンポ変化、スイングの崩れ､ルーティンやセルフトークの内容などについて、ルールや技術的なアドバイスだけでなく、その心理的な背景についても参加者とともに検討していきました。参加者は、実際の行動を通して、各自ご自身の特徴や傾向に対する理解を深められているようでした。

一方で、注意はしていましたが、アドバイスのタイミングと量については難しさを感じました。講師からのアドバイスに加え、参加者同士で積極的に意見交換を行っていたこともあり、参加者の中にはアドバイスを気にし過ぎてリズムを崩したり、新たな気づきから迷いが生じたり、多すぎる情報を提示されたことから混乱している様子が多く見受けられました。今回のプレセミナーに限らず、主観と客観のズレが大きい場合、その気づきが一時的なパフォーマンスの低下を引き起こすことは良くあります。今回はその主観に切り込んでいく場面も多く、さらに主観とのすり合わせを行う時間が充分になかったことが影響しているのではないかと思います。指導の実践場面では、対象者がアドバイスの内容を受け止める準備ができているか、情報量・内容は適切かどうか、どのような見通しを持って指摘するかなどに充分注意する必要があると改めて気づかされました。

通常は、プレー中に自分のこころがどのように揺れ動くのかについて、意図的に注意を向けるということをあまり行っていないように思います。敢えてそこに切り込んでいった今回のプレセミナーは、私にとっても新たな視点からゴルフを見つめる体験となりました。講師としての役目を無事果たせたか不安ですが、私にとって研究の道に進む原点となったゴルフいうスポーツを通して、諸先生方と議論ができ、とても有意義な時間となりました。最後となりましたが、本プレセミナーを企画し、貴重な機会をくださった北村先生、磯貝先生、東山先生に感謝し、講師報告の終わりとさせていただきます。



参加記

伊藤詩織（東北大学大学院）

私は今年の夏にゴルフを始めた。重心やフォームを調整すると、ボールが正面へまっすぐ飛んで行く打ちっ放しの面白さに夢中になっていた。ゴルフのパフォーマンスは、心理状態と密接に関わりあっていると聞く。打ちっ放しとコースで、心理面に違いがあるのか知りたいと思う中、プレセミナーでコースを周ることを知り、参加することにした。私が感じた大きな違いは、あがりを体験したことだったため、その心身の様子について報告したい。

コースデビューではじめに感じたことは、緊張であった。打とうと構えると、ふと先生方の目線を感じる。見られている意識と、ちゃんと打たねばという意識が混ざり合い、目の前のボールに集中するのが難しく感じた。打ちっ放しでは時間をかけ、丁寧に振ることしか練習していなかった。その延長で打とうと試みたが、環境が全く異なっており、動作がぎこちなくなる。冷静になるために素振りをしようにも、時間を使うために今後は待たせてしまうという焦りが出てきた。コースに出るためには、人目や時間の制約といった緊張場面に対する対応策を講じる必要があると感じた。

さらにショットの際に感じたことは、力んでしまうことだった。フィールドの広さでホールを遠く感じる上、先生方の足を引っ張らないよう打数を少なくすることを考え、強いショットを打とうとしていた。クラブを速く振り降ろすと、ボールが驚くほど右へ飛んでいってしまった。先生方にアドバイスをいただきながら打ったが、この日はほとんどが左右に飛んでしまった。指先や腰の感覚が遠く、思うような動作ができていなかったように思う。最後にフォームを見てくださった先生によると、ボールと身体の距離が近かったようで、打ちづらさがあったのではとのことだった。今後はプレイ中に、自分のフォームを冷静に確認できるようになりたい。

疲労の蓄積も早く、コースではプレイや移動が考えていたより速いということも気づいたことであった。私はプレイで力む一方、芝と陽の穏やかさに、一打ごとのんびりとしていた。しかし、気づくと先生方の足取りは速く、急いでクラブを担ぎ後を追った。午後のうちに18ホール周ること、後からくるグループを待たせないこと、さらにグループ内に初心者がおり、ホールごとに打数が多いため、進行を速くしたのかもしれない。同様に、頭の中も大忙しであった。ホールごとに移動方向や自分の打数を数え、打つ際はクラブの選択と打ち方を考えた。遅れをとらないよう心身をフル回転させていると、時折駿河湾がきらきらとその姿を見せてくれた。海風の心地良さも感じられ、私の緊張と疲労を癒してくれた。気づくと先生方も、談笑されながらゴルフを楽しまれていた。ゴルフを教えていただけるこんない日に、足を引っ張っていると思うのは違うことに遅ればせながら気がつき、それからは先生方のプレイやフォームからできるだけ学びとり、楽しむことにした。

セミナーでは他にも、色々と知ることができた。例えば、本当は談笑も控えめにすることがマナーであることを教えていただいた。しかし、コースデビューで緊張していた私にとって、楽しいおしゃべりはとてもありがたいものだった。先生方もリラックスしてその場を楽しまれているようだった。また機会があれば、次は指導の視点を持ちながら参加したいと思った。それまでに、あがりを克服できるよう練習しておきたい。

キーノートレクチャー1

司会報告

山本裕二（名古屋大学）

木島先生は、対人や集団のダイナミクス（規則性）を精力的に研究し、多くの論文を国際誌に掲載しています。そのような業績を知ってか、あるいはタイトルに惹かれたのか、はたまた、会場内に立ち寄る場所がなかったのか（ということはないでしょうが）、開始20分前にはほぼ全席が埋まり、多くの聴衆がキーノートレクチャーの開始を待っていました。

やや緊張気味に「協応秩序」の説明から始まりましたが、三者が、三角形、四角形、五角形、六角形に置かれた輪の中に入り、同時に左右どちらかの方向に飛ぶというユニークな課題を用いた実験結果を紹介しだすとペースに乗り、テンポよく説明が進みました。三角形や六角形の場合には、誰が先導的役割を果たすかはわからない（均等）が、四角形、五角形の場合には回転方向に空き地がある人が自然に先導的役割を担うという、場の形で立ち現れる協応秩序の結果を示されました。これは理論的には「対称性の破れ」という難しい理屈にもかかわらず、この実験課題の意味を、感覚運動－表象－抽象というMascolo & Fischer（2016）の発達論を絡めながら、分かりやすく説明されました。

続いて、同じ実験課題を小学生に行わせた実験結果を紹介されました。そこでは、子どもの先導－追従傾向という個性を取り入れ、グループ分けに工夫がみられました。個性が異なる子どもたちをグループにすると、三角形では大学生と同様な結果が見られたにもかかわらず、四角形では空地を持つ子どもだけでなく、先導傾向が高い子どもも先導的役割を果たすということでした。逆にいえば、追従傾向が高い子どもでも、空地がある場所に位置すると先導的役割を担うとも言えます。他方、個性が似通っているグループでは、三角形でも四角形でも大学生と同様の傾向になるということでした。

これらの実験結果を、小学校1年生の道徳の教科書に出てくる「はしのうえのおおかみ」の話と結びつけ、感覚運動システムを動員しての表象システムの再構築という発達過程の可能性を示唆されました。つまり、もともと持っている表象（考え方）から新しい表象を獲得するときには、表象システムよりも発達過程の下位に位置づく感覚運動システムを用いることが大切になってくるということでした。これは、いわゆる「身をもって知る」ということで、「頭」で理解したつもりだけでは「わかる」ということにならないこともある、あるいは「わかることはかわること」ということを示唆されたと思いました。

最後に、小学2年生での三者のボール保持課題という実験結果を示され、先導性の高い子どもの存在が、新しい協応秩序を生み出すきっかけになるかもしれないということを示されました。体育科教育では「異質協同」ということも言われてきてはいますが、実証的な研究に基づいてその可能性を示唆するものはこれまでに見られなかったと思います。対人や集団にはダイナミクスがあり、グループ分けといった他者も含めた環境を工夫することによって、心理的な発達に貢献できる可能性があるということだと思いました。

身体運動の持つ意味、あるいは他者と運動を行うことの意味は、単に健康づくりやスポーツ文化の伝承に限らないはずです。いわゆる「体育心理学」として、この意味を考えていけるような研究が今後も望まれると思うとともに、そのためには現象を深く理解していこうとする地道な努力が必要であると強く感じました。



キーノートレクチャー1

演者報告「協応秩序の切替えにみられる体育―徳育の形」

木島章文（山梨大学）

理事会からキーノート演者のお話をいただいたとき、私でできることであればと簡単にお引き受けしました。次に全く関係ない経緯で理事会にオブザーバー出席をしたとき、このキーノートには、スポーツではなく体育の内容が求められていることを知りました。その時スポーツ心理学会はスポーツ、体育学会は体育という住み分けがあることに気づき、こんなにのんきな私が皆様の前でお話しても良いものかと、遅れて恐縮する次第でありました。

山梨大学に着任以来、私は附属小学校で色々な経験をさせていただきました。小学校の先生が全ての教科を教えていることが今更に新鮮だったことが思い起こされます。今回の発想にはFD（Faculty development）業務の経験が少し関係しているかもしれません。その業務の一環で、学習指導要領改訂に伴い各教科に求められる学習内容・運営形態の変化という内容のシンポジウムに出席しました。文科省のお役人様と教育学の先生によるお話の一部に、教科横断的な内容を指向すべしというくだりがありました。その指針が、体育（道徳）の学習内容に道徳（体育）の機能を見出そうとした背景にあったのかもしれません。さらにもう一つ、今回の発想には子どもの授業参観も関係しています。教科は道徳で「はしのうえのおおかみ」というくだりでありました。詳しい授業内容は忘れてしまいましたが、平均台のような台を使って授業されていたと思います。

キーノート当日、たくさんの方にきていただいたことは本当にありがたいことでありました。ご参加いただいたおひと方ごとにお礼を申し上げたいぐらいです。某先輩がおっしゃっていましたが、体育・教育を演題の前面に出すだけで、こんなにたくさんの人に聞いてもらえるのかとびっくりしました。キーノートで皆さんにご提示した考えは、他者との衝突や異なる個性との共同行為が、固着しがちな児童のチームワークに柔軟性をもたらすかもしれないということです。その次に提示した「その機能は道徳教育の内容と融合可能か？」という提案には賛否を含む多くの反応をいただきました。その一つに「アリもトリも柔軟かつ確実な身体動作のチームワークを作る。それなら彼らは、あなたのいう道徳性を持っていると考えるべきか？」という疑義がありました。その答えとして、アリやトリの振る舞いそのものがいわゆる道徳性のあらわれとは考えにくいかもしれない、けれども彼ら1個体あるいは群れに備わるある種の知性が我々にもあって、それが他者あるいは世の中の理解に一役買っているのではないかと考えました。どう一役買っているのか、その仕組みを具体的に理解する方法はわかりません。ただその知性の中身を実験的に検討する方法については案があります。そしてそれを走らせるには、体育だけではなく算数（例えば代数幾何）や理科（例えば線形物理）のツールを用いた教科横断的（？）な算段が必要かもしれません。

例示させて頂いたやりとりよろしく、今後も皆さまとの関わりの中で問題意識を研いでいけたら本当に嬉しいです。どうかおつきあいのほどよろしくお願いします。

傍聴記

増澤拓也（琉球大学）

残暑冷めやらぬ静岡で開催された日本体育学会第68回大会にて、木島章文先生のキーノートレクチャーを拝聴しに会場へ足を運んだ。開演時間にはまだ余裕があるものの、既に会場は多くの拝聴者で埋め尽くされており、来場者の本テーマへの関心の高さが覗える。今回の題目は「協応秩序の切り替えにみられる体育-徳育融合のかたち」であり、運動学習領域だけでなく、様々な分野の研究者が興味を持って集まっていた。

まず最初に山手線の通勤ラッシュ時の映像が映し出された。ホームは人で埋め尽くされ、静止画像上では全く移動できるスペースが見当たらないが、ひとたび映像が動き出すと水の流れのように淀みなく行き交う様子が確認できる。歩行者は、今は無くとも隣人が移動することによって出来るスペースへ、他者と競合することなく移動する。これは当たり前の光景だが、よくよく考えると不思議なことが起こっているなと改めて感じさせられた。このような混雑時の歩き方は学校では習わないはずだが、ほとんどの人が習得しており、その場に適した「秩序」が協有されているのである。本発表では、このことについて、「1. 協有する場の形状を手がかりに、秩序のかたちを操作する」、「2. 予備実験：小学生は場をいかに協有するか？」、「3. 提案：体育-徳育融合のかたち」の順で説明された。

まず、「1. 協有する場の形状を手がかりに、秩序のかたちを操作する」では、大学生を対象にした三者跳躍課題が紹介された。これは、三名の参加者が左右どちらかにあるフラフープに両脚踏切で飛び移るという簡単な課題であるが、結果は自他の置かれた環境によって、明確な違いあることを示していた。3者の環境が同じならば同時に跳躍するが、他者の環境を鑑みたとき、先導もしくは追従した方がよいとされる場にいるときはそのように振る舞う。要するに、与えられた場所を自他が共有できるように、環境に指示される立場が自動的に立ち上がるらしい。ではこのような場に要求される（他者の立場を考慮した）振る舞いはいかにして獲得されるのかという疑問が生ずる。

次の、「2. 予備実験：小学生は場をいかに協有するか？」において、先の実験を小学生に対して行った様子が紹介された。ここでは、大学生の場合と違い先導特性の高い子どもの作用が注目された。結論としては先導性の高い児童は場に混乱をもたらすが、新たな秩序への移行をも促すということである。つまり、「皆」がより成熟した秩序を獲得するために、それぞれの個性が重要な役割を担っている可能性が示されたように思う。

そして、「3. 提案:体育-徳育融合のかたち」では、道徳性の土台に運動感覚・表象の蓄積があり、身体の連携からしか産まれ得ない道徳性があることを述べ、体育と道徳教育が融合できうることを提案されていた。このようにただ事象を読み解くだけでなく、いかに身に付けるかという観点は、我々体育領域で研究するものにとって最も大切な考えであろう。

最後に、今回の実験で採用された課題はどれもシンプルな課題であったが、条件や切り口を変えることによって様々なことを浮き彫りにしていた。ついつい、新しい測定装置や小難しそうな概念に飛びつきたくなってしまうが、研究において「工夫すること」と「わかりやすく伝えること」の大切さを痛感した。地道にコツコツと頑張らねばと決意を新たにできる実りある時間であった。

司会報告

武田大輔（東海大学）

本年度のキーノートレクチャー2は、鈴木壯先生（中部学院大学教授、岐阜大学名誉教授）を演者にお迎えし、「身体の語り・身体の動きの語りとこころ」というテーマでご講演頂きました。鈴木先生は、アスリート（以下、選手）に対する心理支援の経験が豊富であり、特に一対一の個別で行われる支援においては、選手の語りをとても丁寧に聴いておられます。そして、実践から得られた資料を基に、多くの執筆をされ、その集大成を「スポーツと心理臨床」と題し上梓されています。

レクチャーの冒頭では、身体とこころを非因果的関連な存在として考え、身体あるいはこころの側面を通して、人間の総体や全体性をみていくことの重要性について語られました。ここでいう総体や全体性とは、ユング心理学での個性化の概念に近いのではないかと思われます。それは、選手の場合、現実的な適応となる競技力の向上や実力発揮とその人の生きる本質的課題との調和とも考えることができます。そして選手の場合、身体からみる方が全体性を理解しやすいのは、主たる自己表現が競技パフォーマンスであるからです。体験しているパフォーマンスを言語化することは容易ではないのですが、彼らの独自の語りは、その人の内面的な世界を想像することに大きく役立ちます。しかし、鈴木先生の指摘するように、聴き手の聴き方が大きく影響し、顕在内容として聴くのと、潜在内容や感情に触れながら聴くのとでは、大きく違うのでしょう。

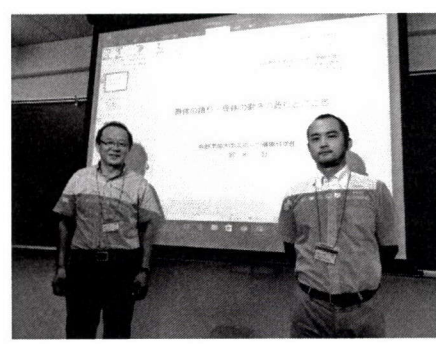
また、鈴木先生は、選手の生の声を聴くことの重要性を訴えつつもそこには病態水準にも注意を向ける必要があると主張されました。それは、選手の語りを創造的水準として聴く際に、下手をすると無意識的な課題を聴き手側の興味本位でもっていたずらに引き出すことになるとの含意があったのではないかと思います。依って立つ理論が違えども、精神病理学等の知識を持っておくことは必要と考えますが、残念ながら一部の心理サポートでは、病気の人を対象とするのではないとの主張から、これを受け入れる態度は持たない実情があると、私は感じております。

後半では、鈴木先生ご自身のケースを紹介していただきました。約10年間に及ぶ心理サポートの中では選手の様々な身体反応や症状が生じたようでした。それらの意味合いを考えながら、苦悩する選手に寄り添われた様子が伝わってきました。長期にわたる過程で、先生ご自身の見立てや選手の心理的課題がどのように変遷したのかさらにお聞きしたくなりました。

最後に、からだの側から人間を理解していく試みを、体育・スポーツ領域以外の専門家が取り組んでいることを紹介し、その仕事は本来であれば我々が積極的に行わなければならないと仰いました。確かに、若い頃にスポーツに多大なエネルギーを注ぎ、身体を駆使して様々な経験をしてきた者だからこそ聴くことのできる身体からのメッセージがあると信じたいところです。

さて、先に紹介した鈴木先生の御著書のあとがきには、先生のこれまでの歩みについて触れられており、その冒頭部分に先生ご自身の性格やスポーツとの関わりについての記述があります。個人的にとても気に入っている箇所であり、学部授業で行うスポーツとパーソナリティの講義の際、その箇所を紹介しております。多くの方に読んで頂きたいです。

最後に、演者の鈴木先生、会場にお越し下さいました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。



キーノートレクチャー2

演者報告「身体の語り・身体の動きの語りとこころ」

鈴木　壯（中部学院大学）

体育・スポーツ心理学研究者は身体が語っていること、身体の心理的側面にもっと関心を向けるべきではないかと思う。例えば、スポーツや身体運動が心理的健康の促進効果は、身体運動の結果としてそうなったとしても、そこに身体がどのような働きをしているのだろうか。身体的側面から心理的な意味を明らかにしてほしい。メンタルトレーニングは、心理的側面だけで成り立っているはずはないので、身体はそこにどのように関わっているのかを明らかにしてほしい。このような疑問が浮かぶ。今回のキーノートレクチャーで「身体の語り・身体の動きの語りとこころ」というテーマで話させていただいたが、これで身体の心理的側面について十分に理解して、わかりやすく話したかというと、そうではないかもしれない。しかし、少しは身体に対する関心を抱くようになってくれるとありがたいことである。

心理学がからだ（身体）のことを考える必要がないわけではない。カウンセリングでも、「身体のことを相当に考慮しなくてはならない」（河合、2002）。また、表面上語られた言葉（顕在内容）だけなく、背後に流れている心の流れ（潜在内容・感情）にも目を配りながら傾聴しなければならない。アスリートのカウンセリングではからだ（身体）・からだ（身体）の動きに関わることを聴くことが多い。○○のプレイでは、どのように状況で、どのように身体が動いているかを聴く。痛みやケガがあるときには、どのような状況でそのようになったのかを、その状況の詳細を聴いていく。それによって身体から心理的意味が理解できるようになっていく。

このようなことはスポーツカウンセリングや心理サポートの事例を詳細に検討していくと理解できることである。これまで学会誌に掲載されている事例論文でも、自験例でもそのようなことがわかる。しかし、そのためには事例を何度も読み、理解し、そのストーリーを読み取らねばならない。

スポーツに関する心理事象を心理的側面だけでなく、総体としての人間を念頭に、からだ（身体）からも理解してほしい。からだ・からだの動きの語りを通して人間を理解してほしいと思う。からだ・からだの動きの語りがその人を示しているという考えを念頭に置きながら、からだの動きを観察し、それが何を語っているかを読み取り、理解するのである。そして、身体の側から人間の成長を見ていくことも考えられる。これは例えば、「身体系個性化」（老松、2016）の理解へと繋がる。このようなことが体育・スポーツ心理学の研究にもっとあってもいいのではないか。

それには、事例研究や質的研究の積み重ねが必要であるし、人間の心理を心理的側面からだけでなく、身体的側面から見ていかねばならない。

傍聴記

浅野　遼（東海大学大学院）

今回、鈴木先生のレクチャーを拝聴して、私は大学院のある授業を思い出しました。その教授は「今の大学生は忙しいよな。やることが多すぎる。俺の時代なんかは自由に使える時間が多くあった。『ゆっくり考える』時間も」と、今の学生の時間の使い方に苦言を呈していました。今思えば、人間的成長に繋がる時間を過ごすことの重要性を私に伝えてくださったのではないかと私なりにその意味を解釈することができますが、もう一つ考えなければならないのは、今の体育・スポーツ現場において、選手や児童生徒たちが自分自身について考える時間をどれだけ保障されているのか、また指導者や教育者がどれだけこの時間の重要性を理解できているかだと感じています。鈴木先生は、身体が何を体験しているかという表現で、選手や児童生徒に対する理解の深め方を説明されていましたが、まさに選手や児童生徒の「ゆっくり考える」時間が成立するためには、鍵となる概念だと思いました。目の前にいる選手が、そのスポーツを通じてどのような自分を表現しようとしているのか、そして試合や練習中において、課題だと感じている場面をどのように乗り越えようとしているのかなど、身体の体験に目を向けることで他者理解に深みが出てくるというのは、今の私が向き合うべき大きなテーマであると感じます。

私自身も、自らのことについて他人に語ろうとすると、なかなか言葉にしづらい経験を多くしてきました。その瞬間に存在している気持ちを表現できるだけの語彙力や言い回しを持ち合わせていないということもあるかもしれませんが、どれだけ自分の中で洗練した言葉だとしても100パーセント相手に伝わったと感じられることはあまり多くないように思います。しかしながら、そういったある種の言葉の窮屈さを感じながらも、私はできるだけ心についての表現に具体性を持たせようと考えていました。というよりも、身体的側面の語りには全く目を向けてこなかったという方が正しいかもしれません。そして自分だけでなく選手に対しても、心について表現できる言葉という表面的な部分のみを重要視していたように感じます。そう考えると、自分が理解できていたと思う部分はとても浅い次元にあるもので、選手との関係性も、言葉にして答えられるという会話で納まってしまうだけの浅いものであったのではないかと自責の念に駆られました。

鈴木先生の「選手の具体的な体験について聴きなさい」というアドバイスは、今の私にとってとても新鮮な視点であり、選手の語りから選手がどのような課題をどのように捉え、そして乗り越えようとしているのかという深みのある理解に繋げられる重要な知見でありました。しかしながら冒頭でも述べた通り、この「からだの体験」に関する心理学的知見を現場で活かしていく時に考えなければならないのは、指導・教育をする側の人間がどれほどこの重要性を感じられているかということです。日本の体育・スポーツ現場がしばしば指摘されている、子どもたちを型にはめる指導や自主性・主体性を奪うような環境づくりについては、この知見からも議論を重ねなければなりません。現場に溢れている身体の語りと慎重に向き合いながら、鈴木先生から与えていただいたテーマを今後の私自身の実践に繋げていきたいと思います。貴重なお時間をありがとうございました。

シンポジウム

司会報告「アスリート・ファーストがもたらした光と影」

土屋裕睦（大阪体育大学）

体育心理専門領域の理事で学会大会委員の佐々木万丈先生より、今回のシンポジウムのタイトルと趣旨説明をうかがったのは3月であった。そこから9月の学会大会まで、シンポジストとの間でおびただしい数のメール等のやり取りや意見交換があり、当日を迎えた。

スポーツカウンセリングを専門とする筆者は、タイトルの「アスリート・ファースト」と聞いてコーチングの基本原理であるAthletes First, Winning Secondを思い浮かべた。当日フロアーにお越しいただいた先生方のほとんどが同じ認識であったと思う。しかし本シンポジウムの趣旨は、Athletes First, Children Secondを念頭に置いている。すなわち、競技者としてのあり方を強く求めるあまり心身の健全な発育発達に悪影響を及ぼすことへの懸念である。UNICEFは子どもの権利について述べる中で、スポーツ傷害やオーバートレーニング、虐待、他に言及している。2020東京大会を迎え、ジュニア・ユース年代の競技への関心が高まる中、今一度この問題を点検評価しておこうというのが、体育心理専門領域のねらいであった。

シンポジストの荒木香織先生は心理コンサルタントの立場で、煙山千尋先生は女性アスリートの心身の健康を守る立場で、そして渋倉崇行先生はグッドコーチの育成ならびにスポーツ環境のインテグリティを高めようとする立場で、それぞれアスリートの全人的な成長を見守ることが重要であるとの認識は一致している。しかしながら「アスリート・ファースト」をめぐる前述の二義性が、当日の議論に混乱を招きかねない。種々議論を重ねる中で、そもそも、アスリートの全人的な成長と優劣を競う条件はないとの考えに至った。そこで私たちが理想とする「アスリート・ファースト」の実現している姿に、「アスリート・センタード」の言葉をあてることで共通理解を得て、シンポジウムを迎えたのであった。

シンポジウムでは、それぞれの立場から具体的なエビデンスを出していただいた。荒木先生からは、ラグビーW杯での歴史的勝利の陰に変革型のリーダーシップがあったことが報告され、スポーツの持つ力、すなわち光の部分を改めて確認することができた。一方で、煙山先生や渋倉先生からは、女性アスリートの摂食障害やスポーツ指導現場での重大事故や体罰問題などが具体的なエビデンスとして取り上げられ、アスリートとしての生き方を追求するあまり、そこに生じているひずみ、すなわち影の部分にも目を向ける必要性が指摘された。

筆者の見るところ、我が国はスポーツ立国戦略の下、アスリートの育成・強化は確実に成果を上げている。例えば2016リオ大会でメダルを獲得した種目のほとんどがNTCに拠点に強化を進めた種目である。一方で、JOCは「人間力なくして競技力向上なし」の標語を掲げ、またJSCはアスリートの「デュアルキャリア」を我が国のスタンダードにしようと先進的なプログラムを開発している。今回の機会を得るまで、筆者はアスリート育成と全人的な成長とがうまくバランスを取って進んできていると見ていたが、シンポジストのお話を聞いて、今後は光の部分に奪われがちな影の部分にも、目を凝らす必要のあることを痛感した。

2020東京大会を控え、体育・スポーツがこれまでになく社会的な関心を集める中、こう言った問題点だけを指摘するのは、当該領域の専門家として無責任である。例えば渋倉先生からは新しい時代にふさわしいコーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」（スポーツ庁）を活用したコーチ育成も紹介していただいた。会場には、体育心理専門領域以外からも多数の学会員が集まってくれた。いまこそ、専門領域の垣根を超えて、その対策にも知恵を絞る必要があることを確認した、有意義なシンポジウムであった。

シンポジウム

演者報告「これからの時代に求められる青少年スポーツ指導者」

渋倉崇行（桐蔭横浜大学）

青少年のスポーツ活動には、参加者の幅広い人間形成に寄与することが期待されています。指導者の多くもこれと同様の考えを持ち、日々の指導に励んでいることでしょう。ところで、スポーツに深くコミットしてきた学生にスポーツで学んだことを問えば、挨拶・礼儀、上下関係、忍耐力という言葉が真っ先に返ってきます。これらがスポーツを通じて得られる心理社会的スキルの一部であることに違いはありませんが、権威主義的な指導体制の下で身についたものという懸念が残ります。一方、運動部活動の在り方を巡る社会の関心はこれまでにないほど大きいといえます。その背景には部員の生命を奪うほどの暴力的指導や重大事件・事故の発生があります。本来、運動部活動はスポーツの楽しさや喜びを味わうものですが、そうした理念とかけ離れた指導が行われるのには、経験主義的な指導観を持つ指導者の存在があるといえるでしょう。「勝つため、選手のため」に行われる指導は、必ずしも「人間形成のため、青少年のため」の指導とはなりません。現在、指導環境の整備や指導者の資質能力向上に向けた取り組みが国をあげて行われつつあります。そのような中、スポーツ心理学が果たすべき役割とは何なのか考えることが重要です。

発表では最初に、アスリート・ファーストによる光の部分を紹介しました。すなわち、青少年スポーツの主な場である「運動部活動」や「スポーツ少年団」活動の意義や効果を、いくつかの指針をもとにして紹介しました。また、スポーツ活動の主に心理的効果に関わる先行研究（例えば、有能感の向上、不安低減、対人関係の改善等）も紹介しました。これらの内容から、私たちは身体的、精神的、そして社会的な健康に関わるスポーツの効果を広く享受してきたことを指摘しました。

しかしながら、私たちはこのようなスポーツの光の部分だけを受けてきたわけではありません。続いては、アスリート・ファーストの逸脱による影の部分を紹介しました。すなわち、スポーツのマイナス効果を指摘する先行研究（例えば、無力感や運動嫌いの形成、バーンアウト、離脱等）とともに、最近僅か数カ月間（2017年6月～8月）に報道された運動部活動中の体罰や熱中症事故、それに学校管理下の事故や体罰の発生に関わる統計データを示すことにより、いかに青少年スポーツが重大事件・事故と近い存在であるのかということを理解しました。さらに、運動部活動中に起きた死亡事件を紹介する中で、事件に関与した運動部指導者の資質能力や人間性を疑いたくもなりました。このように、青少年スポーツの意義とは程遠い現実があることも理解したうえで、その原因として指導力の問題が大きいことを指摘しました。

最後は、これからのスポーツ指導者育成に向けた我が国の取り組みを紹介しました。特に、コーチング・イノベーション推進事業の展開として、グッドコーチに求められる資質能力として指導者自らの「人間力」の育成が望まれるということを紹介しました。

今後は、作成されたモデル・コア・カリキュラムに基づいて、関係団体や体育・スポーツ系学部を有する大学等が、具体的にどのように指導者育成に取り組むのかということが重要です。「今あるスポーツをさらによいものにして次の世代につなげていく」という使命感が現存する影の部分を払拭し、青少年スポーツに光をもたらす重要なカギになると信じています。

演者報告「女性アスリートに潜む健康問題」

煙山千尋（岐阜聖徳学園大学）

今回のシンポジウムでは、アスリート・ファーストの逸脱が招く「影」の部分である、女性アスリートのストレス問題や女性特有の健康問題をテーマに発表をした。その内容は、女性アスリートの健康問題の実情や私自身がこれまでに取り組んできた研究結果を発表するものであり、真のアスリート・ファーストを実現するための議論へつながる話題提供ができればと考えた。

適切にアスリート・ファーストが実現された場合、サポート体制が充実し、競技力の向上、選手の心身の健康状態の改善、社会への良い影響が期待できる。しかし、その逸脱により、意図せずとも競技力の低下や重大な健康問題、競技からの離脱を引き起こす危険性がある。そのような「アスリート・ファーストの逸脱」が招く弊害の一例として、「女性アスリートの三主徴(Female Athlete Triad; FAT)」がある。FATとは、①利用可能エネルギー不足（Low energy availability)、②視床下部性無月経（運動性無月経)、③骨粗鬆症の女性アスリートにおいて出現率の高い３つの健康問題を指す。

FATが重篤化する原因として、日本においては、選手にとって重要な人物である指導者に健康問題について相談しない現状に加えて、指導者に女性が少ないということも相まって、女性特有の健康問題について相談しにくいという現状がある。また、競技の特性上、審美系や持久系の種目の選手は、体重や体脂肪を低下させる必要性が高く、そのために危険な減量を行うことも危惧されている。特に、勤勉な選手ほど、競技力向上のために食事を節制して身体を極限まで絞り込み、無月経を誰にも相談せずに放置し、疲労骨折等の長期的怪我を誘発させ、トレーニングの継続すら困難になる傾向が高いことも報告されている。

さらに、FATには、継続的で激しいトレーニングや食事制限により摂取エネルギーが低下することが関係しているだけでなく、心理的ストレスとの関連も示されている。これまでに筆者は、女性特有のストレス要因を明らかにして測定評価尺度を作成し、競技・日常それぞれのストレスモデルの構築を試みてきた。これらの結果から、FATを発症している場合は、楽観的コーピングを用いることが有効であり、ストレッサーに曝された際に、その状況を過度に深刻に捉えすぎず、うまくいかないこともあると考えることにより、無気力感や抑うつといった心理的ストレス反応が低減する可能性が示唆された。一方、FATを発症していない場合は、ハラスメントや差別に関するストレッサーを知覚すると回避的コーピングを選択しやすいことがわかった。回避的コーピングは、多くのストレス反応を引き起こす要因となり得るため、ストレス反応の表出を最小限に抑えるコーピング方略を探る必要性が高いと考える。

FATは、エリート選手だけでなく、活発な運動量を持つ女子や女性にも高い出現率が見られることから、競技力に関係なく全ての女性アスリートに予防の必要性がある。今回のシンポジウムでの発表と議論を通じて改めて、女性特有の健康問題に関する研究が益々進展し、研究と実践が融合した真のアスリート・ファーストを目指した議論を繰り返され、選手を取り巻く支援システムが構築される必要性を強く感じた。貴重な経験の機会をいただき、ありがとうございました。

シンポジウム

演者報告「真のアスリート・ファーストコーチングをめざして」

荒木香織（園田学園女子大学）

2020東京オリンピック・パラリンピックを迎えるに当たり、意思決定機関は、「アスリート・ファースト」を推奨している。しかし、「アスリート・ファースト」の共通理解や、言語の統一（プレーヤーズ・ファーストも存在する）はなされていない。レイナー・マーティン（1981）は、著書「サクセスフル　コーチング」において、多くの指導者は、勝つために指導、子どもが楽しむことができるように指導、そして、身体的、心理的、社会的な発達を助けるために指導しているのではないかと述べている。そこで重要なことは、まず、指導者の判断や行動などすべてが、1）アスリートにとって最良であるかを考えること、2）アスリートやチームにとって勝利につながるかを考えること、としている。どちらにしろ、指導者はアスリートを中心に考えながら指導を進めていくべきとの提案である。具体的には、スポーツに全力で取り組むこと、最高のプレーを目指すこと、スキル習得のためのミスを恐れない、そして褒められることや理にかなった批判を受け入れることができるような選手の育成を目指すべきであるとしている。なぜならば、自尊心、有能感、モチベーションの向上につながるからである。

しかしながら、日本においては、競技レベルや年齢に関わらず「勝つため」のみに指導をすることが多いのではないだろうか。指導者の役割といえば自身の意思決定により、アスリートの身体的・技術的・心理的能力を強化することであり、これをコーチ・センタードと表現し、アスリートの意思を含まない指導のプロセスとして捉えられている（Martins, 2004）。しかしながら、強化の過程において、アスリートに判断を委ねるとともに、個々のコンディションやスキルレベルを鑑みた指導をすることは「アスリート・センタード」とされる（Romar et al., 2016）。

今後はアスリート・センタード推進のため、まず指導者の資質向上を目指し、リーダーシップスキルの強化に取り組む必要がある。たとえば、Bass（1998）は変革型リーダーシップモデルを通じ、指導者がアスリートへの情緒的訴求を通じて、彼/女らが持ち合わせる能力を最大限に発揮できるように働きかける必要があるとしている。理想的な影響力、モチベーションを鼓舞する、思考力への刺激、及び個々への配慮といった要素について強化することにより、より充実したリーダーシップを取ることが可能となる。アスリートの人格形成や心理的安寧を鑑みず、競技力向上のみに執着する指導者への適切な情報提供を進めていく上でも、実際にスポーツ心理学者が指導者講習会等を通じて、リーダーシップのスキル向上のための研修会を実施することも重要であると考える。さらに、指導者、コーチングスタッフを取り巻く環境を整備するためにも、各競技団体及び主要意思決定機関に分業制（フィジカル・メンタル・栄養・メディカル等）への理解を浸透させることにより、アスリート・センタード、真のアスリート・ファーストの実現を目指すことが可能であると考える。



シンポジウム終了後

傍聴記

奥野真由（久留米大学）

アスリート・ファーストとは一体何を意味しているのだろう。これまであまり深く考えることなく、なんとなく“良い感じ”の言葉として受け止めていました。この機会に、じっくりと考えてみたいという思いを持ち、シンポジウム「アスリート・ファーストがもたらした光と影」を拝聴しました。

司会の土屋裕睦先生（大阪体育大学）は、光の部分だけでなく影の部分にも焦点を当てることについて、「そうすることで東京オリンピック・パラリンピック後、より良いレガシーを残すことができるのではないか」と述べられ、その意義が説明されました。

荒木香織先生（園田学園女子大学）は、ご自身の研究活動や心理サポート実践から、真のアスリート・ファーストを実践するコーチングに関するご発表でした。選手の自尊心・有能感・モチベーションを向上させる関わりが勝ちにつながることなど、コーチの役割について述べられました。チームの勝利のために選手をどう育てるか、ではなく、選手を一人の人間としてどう育てるか、それがチームの勝利にどうつながるか、という視点を持つことが真のアスリート・ファーストを実践するコーチングなのではないか…と考えを整理することができました。

煙山千尋先生（岐阜聖徳学園大学）は、アスリート・ファーストの逸脱が招く影の部分として、女性アスリートの健康問題や特有のストレッサーについて、ご自身の研究活動をもとにしたご発表でした。「選手のため、勝利のためと、周囲が“良かれ”と思い行っていることで選手を追い詰めてしまうことがある。」というお話しは、選手に関わる立場としてドキリとする指摘でした。女性アスリートが自分らしく競技に取り組むためには、まずアスリート自身が正しい知識を身につけることが大切であると述べられました。そのための講習会実施や情報提供など、心理担当者が担うべき役割について考える時間となりました。

渋倉崇行先生（桐蔭横浜大学）は、アスリート・ファーストの逸脱が背景にあると考えられる運動部活動での事件や事故事例を提示した上で、青少年スポーツの指導のあり方に関するご発表でした。運動部活動での事件や事故が起こる背景には、“無知”と“無理”があるという先行研究の提言をふまえて、指導者やジュニアアスリートを対象にしたご自身の取り組みについて述べられました。スポーツがもたらす効果（光の部分）は、身体的・心理的・社会的成長による総合的な人格形成である、という視点を常に持つことが、アスリート・ファーストの逸脱を防ぐ上で大切なことであると改めて感じました。

三名の先生方のご発表の後、フロアとの意見交換が行われました。フロアからの質問は、指導者育成に関することやアスリート支援に関することなど、具体的な内容が多かったように思います。アスリート・ファーストを実践する過程で感じる難しさやわからなさを参加者全員が共有し、検討する時間となったのではないでしょうか。

競技スポーツにおいて、取り組みの成果である“結果”とは“記録や成績”を指す場合がほとんどです。しかし、体育（スポーツ）心理学の学術的な背景を持った心理担当者がアスリートやチームに関わる際には、アスリートの“こころの成長”という部分も含めた成果を“結果”として捉えることが大切であると、シンポジウムを拝聴して感じました。自分自身が真のアスリート・ファーストを実践するために、ケース検討やスーパーヴィジョンなどの振り返りと自己研鑽のための取り組みをこれからも続けていこうと思います。貴重な提言を頂いた演者の先生方、企画者運営に関わった先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

口頭発表 1

座長報告

横山慶子（名古屋大学）

大会 2 日目の午後に、運動制御・学習に関する 2 つの演題の口頭発表が行われた。

一つ目の演題は、南山大学の平川武仁先生が、「連続・離散力学系におけるポアンカレ断面における運動パターン切替の遷移状態と切替時間長との規則的関係」というタイトルでご発表された。まず研究の背景として、二つの論文をご紹介された。ひとつは、共同研究者の山本裕二先生の発表論文で、テニスのフォアとバックを連続的に切り替える打動作に、フラクタル構造が確認されたという論文である。もうひとつは、鈴木啓央先生が山本先生のご研究をさらに発展させて、卓球の打動作を対象として、時間的制約を変更した際のフラクタル構造の特徴に、熟達差を確認されたという論文である。これらの先行研究では、フォアとバックという 2 つの打動作の切り替えを対象としていたが、平川先生の今回のご研究では、切り替えが 3 つになった場合の運動パターンを検証された。実験では、ディスプレイ上で表示される目標点をペンタブレットで追従する課題を用いられており、3 方向の目標点の切替え動作の時間的制約を変更して実施されていた。結果は、フラクタル構造に加えて、切り替えの遷移パターンと時間圧に規則性が認められたことが示された。質疑応答では、3 つの切り替え動作が要求される具体的なスポーツ場面や、2 つの切替え動作でみられた規則との違いなどについての議論がなされた。実験課題は十分に統制されたものであり、解析結果は緻密で精度の高いものと感じられた。切替え動作が 1 つ増えるだけで動きの複雑さが一気に増すと考えられるが、そこにも単純な規則が認められた結果は、興味深かった。

二つ目の演題は、東京学芸大学の碓氷典諒先生が、「剣道の面打撃における攻防切替技能の熟達差」というタイトルでご発表された。多くのスポーツで、相手の状況の変化に柔軟に対応することが求められるが、こうした状況を全身運動のレベルで検討した例は少ない。この研究では、遂行中の全身運動を異なる運動に切り替える際の熟達差を、剣道の攻撃から防御への切替え動作に注目して検討されていた。剣道は、対人スポーツのなかでも、静と動の動きのパターンが明確であり、運動パターンの切り替えを検証する題材として適性が高いと感じられた。大学生の上級者と中級者を対象に、面を打撃する課題と相手からの反撃を防御する課題における身体の動きを計測した結果、面を打撃する課題では、熟練差は確認できなかった一方で、相手からの反撃を防御する課題において、上級者は中級者に比べて、素早く正確に攻撃から防御へ運動を切替えていたことが示されていた。質疑応答では、防御における上級者の動きの詳細や、熟達差を更に分別できる指標の可能性などについての議論がなされた。共同研究者の奥村基生先生のご研究からも常々感じていたことであるが、同程度の競技経験期間でありながらも、壁を越えられている上級者と、そうではない中級者の違いを、綿密な実験課題で炙り出す研究アプローチは、高いレベルのスポーツ現場で重要な知見となると感じた。

以上の 2 演題は、研究の題材や手法は異なるものの、「運動の切り替え」というキーワードで共通しており、環境を含めたヒトの動きを理解することの面白さを改めて感じられるご発表であった。ご発表の先生方およびフロアの先生方に感謝を申し上げたい。

口頭発表 2

座長報告

荒井弘和（法政大学）

刺激的で大盛況だった木島章文先生（山梨大学）のキーノートレクチャーの余韻が残る中、3 題の研究発表が行われました。

1 題めは、有冨公教先生（筑波大学大学院）による、「認知的方略特性と競技中のパフォーマンス発揮との間における思考の媒介効果　選手は誰もがネガティブ思考をやめるべきか？」です。

興味が自動的に生起してしまうような題目に違わず、非常に意義のある成果を示してくださいました。スポーツメンタルトレーニング（SMT）実践の現場との関連や、研究の前提や必要性を丁寧に説明してくださり、しかも分析結果をシンプルに示してくださったおかげです。「SMT 実践の際は見立てが大切」というメッセージは、多くの参加者の心に響いたことでしょう。

2 題めは、前田凌汰先生（大阪体育大学大学院）「セルフトークが児童の運動パフォーマンス及び課題中のストレスに及ぼす影響」です。

児童に対して、SMT 技法の一つであるセルフトークを実践することの根拠を求めるという挑戦的な研究テーマを設定した上で、児童に対してもセルフトークが有効である可能性を示してくださいました。児童に対して SMT を実践することは容易ではありませんし、実践の根拠となる研究を積み重ねる必要があると考えます。前田先生の研究は、いわば未開の地を開拓するような研究であり、大きな可能性を秘めていると感じさせられました。

3 題めは、門岡晋先生（金沢星稜大学）「スポーツ競技者におけるバーンアウト傾向が起床時コルチゾール反応に及ぼす影響」です。

アスリートのバーンアウトを予防するために、生理指標を活用することができるということを示してくださいました。バーンアウト傾向と関連があるのはコルチゾールの総量か？変化量か？という論点も明快で、聞いていて気持ちが高ぶりました。研究手続きの各階梯を説明してくださったおかげで、生理指標に疎い私でも、興味深く聞かせてもらうことができました。

学会発表の口頭発表のセッションでは、参加者が発言する時間が設けられています。しかし、参加者からの発言がないとき、座長が予定調和的に「発言がありませんので、それでは座長から…」となってしまうケースが散見されます。私は、このことは好ましくないと考えています。座長の役目は、発表を聞いている参加者から質問や意見が出やすい場を作ることだと思うからです。とはいえ、会場を沈黙が包み込むとき、ついつい「発言がありませんので、それでは座長から…」と言いたくなるものです（人間だもの…）。

そういう事態に陥らずに済んだのは、参加者の皆さんの誠意と熱意のおかげです。

演者しかマイクを使えない、会場は広くてしかも縦長という状況で、皆さん要点をまとめて発言をしてくださいました。自分も発言したかったとお思いの先生方もいらっしゃったことでしょう。発言することにコミットしてくださった先生方に、感謝申し上げます。

末筆になりますが、3 名の演者の先生方、参加してくださった皆様、そして、残暑が厳しいなか学会を運営してくださった、村越真先生・杉山卓也先生はじめとした静岡大学の皆様に、心より、深くお礼を申し上げます。

口頭発表 3

座長報告

平田智秋（十文字学園女子大学）

大会 2 日目の最終セッションで、座長を勤めさせて頂きました。前のセッションから若干、時間が空いたにも関わらず、場内はほぼ満員で、活況のもと、お二人の先生がダイナミクス関連の口頭発表をなさいました。

まず、工藤敏巳先生（宮城学院女子大学）が「リターンマップ解析による長縄跳びの調整機序について」をご発表されました。これは 9 人の実験参加者が長縄跳びをする際に、全員の動きと縄の動きをモーションキャプチャし、その調整機序を記述する、という大掛かりな実験でした。跳び手が引っかからずに飛ぶためには、縄と自分の動きとのタイミングを調整する必要があります。その際、縄が一定の周期で回転してくる訳でもなく、一緒に跳ぶ人たちのタイミングの取り方にもバラつきがある中で、9 人が息を合わせるというところに、この課題の面白さがあると感じました。

リターンマップ解析は、前の跳躍でのふるまいを、次の跳躍へと写像し、その時間発展を記述する手法です。これを用いれば、どこかに「引き込まれていく」過程や、「狙ったところから離れていく」様相を分かりやすく記述できます。大縄跳びは回転する縄や、一緒に跳ぶ人達との位相を調整しながら進みます。よって跳躍を重ねるうちに「思ったより縄が早く回ってきた」とか、「なんだか跳ぶテンポが早まっている気がする」など、位相のズレが生じます。それらの動的な変化を記述する道具としてリターンマップに着眼された点に、工藤先生のご慧眼がみて取れます。

当日、先生も仰っていましたが、この研究は始まったばかりのようです。課題の面白さ、そして手法の表現力は確実にありますから、今後、どのような進展があるのか、とても楽しみになりました。

次に藤井慶輔先生（理化学研究所 革新知能統合研究センター）が「集団球技における選手全員の動きのデータから推定される得点確率―異なる非線形ダイナミクスの比較と教師あり学習による分類」をお話し下さいました。これはバスケットボールのコート上にいる選手 10 人の位置データをもとに「いつ、シュートが入るか」を予測・分類しようとする、選手やコーチにとっては切実な研究です。膨大な情報量、計算量を背景に、一つ一つ理論を積み上げていく最先端、かつ堅実な手法には圧倒されました（全てを理解できた訳ではありませんが）。

「既知をもって未知を制す」と云いますが、現在までの情報を用いた未来の出来事予測は、人間が培ってきた知恵の一つだと考えます。これを可能とする技術の開発は、壮大なチャレンジです。その際に、膨大な情報の中から選手間の距離に注目し、突破口を見出そうとする目の付け所が鮮やかでした。また「シュートが打たれるかどうか」ではなく、「シュートが入るかどうか」までを予測しようとする姿勢にスケールの大きさを感じました。このような研究が、ゲーム構造の理解を大幅に進めると考えます。

最後になりましたが、当日のセッションに参加された先生方、そして運営して下さった大会スタッフのみなさまに感謝申し上げます。発表されたご両名の研究の魅力、そしてフロアの先生方から白熱した議論から、貴重な学びの機会を頂きました。少し時間が押してしまいましたが、それは座長の管理能力の低さによります。何卒ご容赦下さい。

口答発表 4

座長報告

伊藤友記（九州共立大学）

口頭発表二演題について座長を務めさせていただいたので、内容と若干のコメントをさせていただきます。

第一演題は「ジュニア期を指導する女性コーチの学びに関する事例的研究 －新体操女性コーチを例としてー」と題し、流通経済大学大学院修士２年生の黒沢氏のご発表でした。氏の研究背景は、コーチが学び続け資質を向上していくために、具体的に誰に、何を、どのように学べばよいのかについてが明確でないこと。また女性指導者が増加するとともに、女性アスリート特有の三主徴（エネルギー不足・骨粗鬆症・無月経）への対応など、いわゆる優秀な女性指導者はどう学び、ライフイベントとの両立をどのようにしているのかを明らかにしたいということでした。方法論は二名の優秀指導者への半構造化インタビューを実施し、その語りをKJ法によって学びのカテゴリやライフイベントとの両立について浮き彫りにするというものでした。氏ご自身が新体操と関わっておられることから、新体操の女性エキスパートコーチを対象としたインタビューでした。そこから明らかになったことは、新体操の女性エキスパートコーチは、1）採点競技ならではの「観る目を養うこと」が指導に活きると捉え、審判としての学びを多くしていること、2）コーチとしての成長過程の中で、徐々に他コーチとの交流や実践の中で学んでいくこと、3）ライフイベントが指導の学びに影響を与えていることは推察できず、指導者独自の何らかの方法により解決しているのではないか、ということでした。今回の研究は、氏ご自身との関わりから、対象が「新体操」と限定されていましたが、今後他競技においても女性指導者を対象とした調査を継続し、女性指導者特有の学びの様子を明らかにしていただきたいと思いました。

第二演題は「チームビルディングトレーニングの導入と効果に関する定性的研究 －Ｊリーグユース(U-18）チームを対象としてー」と題し、順天堂大学の水野先生らのご発表でした。氏のご発表は、チームに対するチームビルディング（以下TB）の介入効果を定性的に検証しようとしたもので、その検証方法は、TB介入後の参加者の内省データを解析ソフト（SPSS：Text Analytics）のテキストマイニングによって分析するというものでした。介入効果を提示する場合、定量的であれ定性的であれ比較するための対象群（統制群）を設ける方法論が常道ですが、このような現場実践においては対象群を設けることには無理があります。それを克服しようという方法論がシングルケースデザインですが、本研究はその研究デザインを取ってはいませんでした。そのため、私は本研究を実践事例報告という位置づけでお聞きしていました。必ずしも介入効果の定量化が容易ではないサポート実践事例を報告する場合に我々ができることは、数量的な結果を示すことよりも（もちろんそれも重要ですが）、実践の中身を忠実にそして詳細に述べることにあると思います。ここで言う「詳細に」というのは、「何をしたか(what)」といったプログラムの内容ではなく、「どのように行ったか（how)」という観点からの報告を指し、それがなされて初めて実践者と聴衆が共有できる参考データとなり得ると思うのです。確かに分析ソフトを用いた解析は、介入効果を検討する一つの有効な方法としての可能性を備えているとは思いましたが、個人的にはもっと実践の中身を詳細にお聞きしたいと思いました。

口頭発表５

座長報告

渋倉崇行（桐蔭横浜大学）

大会３日目の午後に口頭発表５が行われ、４演題の座長を務めさせていただきました。キーノートレクチャー２の直後ということもあり、会場に用意した席がほとんど埋まるほどの来場者がありました。

最初の演題は、薮中佑樹先生（大阪体育大学）による「競技スポーツにおける不安・緊張を和らげるユーモア表出に関する研究」でした。ユーモア表出の因子構造を検討したところ、遊戯的ユーモア表出、攻撃的ユーモア表出、不適合ユーモア表出の３因子が見出されたということでした。また、競技意欲の側面から、これらユーモア表出のリラックス効果が考察されました。発表をお聴きして、スポーツ競技でリラックス状態を導くための手法としてユーモアに着目したのはユニークだと感じました。また、実践での応用を考えた場合、ユーモアが効果的に働く場面や状況を特定していくような研究も期待したいと思いました。

２つ目の演題は、松山博明先生（大阪成蹊大学）による「アジアサッカー選手の競技力向上に関する研究：ブータン代表チーム選手の競技力による実態調査から」でした。松山先生はブータン代表監督を務められた経験をお持ちです。その代表チームに必要な強化策、およびトレーニング内容を導くことが本研究の目的でした。発表では、最初にブータンサッカーの現状が動画により紹介されました。その後、JFA フィジカル測定や DIPCA.３を用いた調査結果から、育成年代から非利き足と決断力を養うトレーニングの必要性が示されました。討論では、多方面からの実態把握に基づいたトレーニング内容の提案、導入の必要性について意見交換されました。

３つ目の演題は、井川純一先生（日本大学大学院）による「クロスカントリースキー選手の競技パフォーマンスを規定する感性情報の特徴：ダイアゴナル走法の滑走感覚を対象として」でした。クロスカントリースキーは常に変化する競技状況に合わせた滑走技術の適正な選択と調整が求められます。発表は選手が滑走感覚としてパフォーマンス調整に用いるプロセスを感性情報処理として捉えて、その特徴を競技レベルにより比較するという内容でした。質疑応答では、雪上スポーツであることによる環境の変化を測定項目に組み込み、それを結果に反映させていくことの重要性が指摘されました。また、井川先生からは今後の研究の発展として、滑走感覚の鋭敏さを養うことに向けたコーチングにつなげていきたいということが話されました。

最後の演題は、村瀬浩二先生（和歌山大学）による「スポーツ参加に影響する性格特性：短縮版 BIG FIVE 尺度を用いて」でした。本研究より以前に、村瀬先生は体育授業における勤勉性と体育授業で夢中になる頻度（フロー）との関係を検討されています。本研究では、市民マラソン大会参加者を対象とした質問紙調査の結果から、代表的な性格特性のうち勤勉性が最も生涯スポーツを支える要素であることが示唆されました。発表をお聴きして、今後は市民マラソン大会参加者以外でも追試を行うことにより、結果の一般化を導くことも期待したいと感じました。また、性格特性とスポーツ実施の「頻度」との関係の他、スポーツ実施の「内容」等についても検討することは、生涯スポーツ実践に向けた効果的な対策の提案につながると感じました。

最後に、積極的に議論にご参加頂いたフロアの皆様に感謝を申し上げます。

演者報告

谷木龍男（清和大学）

9月7日(金)から9日にかけて、静岡大学静岡キャンパスおよびコンベンションアーツセンター［グランシップ］において日本体育学会第68回大会が開催されました。

私は、2日目（8日（土））の午前中（9時30分から11時30分）に「空手道選手のマインドフルネスとバーンアウトの関係」という演題でポスター発表させていただきました。

この研究は、I県空手道連盟強化指定選手87名(男61名、女26名、平均年齢16.2±2.8歳）を対象として、スポーツにおけるマインドフルネスと競技特性不安、バーンアウト、さらに日常生活全般における心理的柔軟性の関係を単純相関と構造方程式モデリング（SEM）によって検討したものです。

マインドフルネスとは「今・この瞬間の体験に注意を向けて、現実をあるがままに受け入れること」、心理的柔軟性とは「思考、感情、感覚、記憶、それらが伝えてくる内容ではなく、それらをそれそのものとして、自己防衛することなく、受け容れ、環境から体験するものを基礎として、連続した価値の選択を基に、行動を持続したり、変化させたりする能力」（茂本・武藤、2012）と定義されるもので、両者とも第三世代の認知行動療法にいて重要とされている概念です。

スポーツにおけるマインドフルネスはスポーツ競技者版マインドフルネス傾向尺度（雨宮・遊佐・坂入、2015）によって、競技特性不安をスポーツにおける競技特性不安（橋本・徳永・多々納、1993)、心理的柔軟性を日本版Acceptance and Action Questionnaire-II（7項目版）（嶋・柳原・川井・熊野、2013）によって測定しました。

相関分析の結果、スポーツにおけるマインドフルネスと競技特性不安、バーンアウトの負の相関(r=-.72,-.55)、心理的柔軟性と競技マインドフルネスの正の相関（r=.52)、競技特性不安とバーンアウトの負の相関（r=-.56,-.32)、さらに競技特性不安とバーンアウトの正の相関（r=.41）が示されました（全てp<.01)。

また、SEMによっていくつかのモデルを検討した結果、心理的柔軟性がスポーツにおけるマインドフルネスと競技特性不安に、そして競技マインドフルネスが競技特性不安とバーンアウトに影響するモデルが最も高い適合度を示しました（$\chi^{(2)}$=1.83, n.s., GFI=.986, RMSEA=.11, RMSEA<.001, AIC=17.83)。

これらの結果から、競技を離れた日常生活（＝安全な空間）でマインドフルネス・トレーニングや自律訓練法などによって心理的柔軟性を高めることが、直接的に、さらにスポーツにおけるマインドフルネスを通じて間接的に、競技特性不安を低下させ、バーンアウトを予防する可能性があると考察しました。

幸い、多くの先生方にご質問と共に貴重なご意見をいただき、今後の研究・実践に対するアイディアとエネルギーを得ることができました。また、学会開催にご尽力いただいた先生方や学生の皆様、企画いただいた関係者の方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

演者報告

長谷川弓子（岩手大学）

静岡市街と駿河湾を臨む絶好のロケーションに位置する静岡大学静岡キャンパスで9 月8 日～10 日に日本体育学会第68 回大会が開催されました。私は「クラッチ・パッティング：プレッシャー下のゴルフパッティングと心拍変動」という演題でポスター発表を行いました。この研究は、行為者のパフォーマンス中の心拍変動（HRV）に着目し、プレッシャー下でパフォーマンスを低下させる者（チョーキングパフォーマー）と、プレッシャー下にもかかわらずパフォーマンスを向上させる者（クラッチパフォーマー）の差異を検討したものです。ゴルフパッティングを実験課題とし、ハンディキャップ8 以下の23 名のアマチュア競技ゴルファーを対象に実験を実施しました。実験条件はコントロール条件とプレッシャー条件の2 条件を設定しました。プレッシャー条件では、設置されたパッティング台を挟み込むように、パッティング方向の前後に計12 名のギャラリーが配置された環境で、参加者にプレーしてもらいました。パッティング得点によって、参加者を事後的にチョーキング群とクラッチ群の2 群に分け、両群の状態不安得点（State-Trait Anxiety Inventory Form JYZ Y-1）、心拍数、LF HRV（低周波成分； 0.04-0.15 Hz）、HF HRV（高周波成分； 0.15-0.4 Hz）、LF/ HF（低周波数/ 高周波数成分）を比較しました。その結果、LF HRV のみに差がみとめられ、クラッチ群のLF HRV はプレッシャー下で変化がみとめられなかった一方で、チョーキング群のLF HRV は低下していたことが判りました。なお、両群ともに、コントロール条件にくらべプレッシャー条件では、認知不安得点と心拍数が増加しており、両変数に群間の差異はみとめられませんでした。したがって、実験で設定されたプレッシャーは、チョーキング群だけでなくクラッチ群にも影響を及ぼしていたと考えられます。先行研究により、プレッシャーなどによる認知的負荷の増大はHRV のパワーを減少させ、その影響は特にLF HRV にみられることが指摘されています。このことから、チョーキング群のパフォーマンスの低下は、プレッシャーによる認知的負荷の増大によるものと推察されました。これらの結果から、ファインモーターコントロールが必要とされるゴルフパッティングのような運動課題では、LF HRV がパフォーマンス向上の要因となる可能性があると考えています。

スポーツメンタルトレーニングの現場においては、選手や指導者から「あがり」に関する相談が非常に多いと感じています。近年、脳波や心拍変動などのバイオフォードバック法を用いたトレーニングの効果を示す研究成果も多数でてきており、このような選手の問題の解決に少しでも役立つことのできる「あがり」対策トレーニングの考案およびその効果の検証が必要だと感じています。今後も現場に還元できるような研究を目指して、継続して研究を行っていきたいと思います。

発表時には多くの先生方にご意見やご質問をいただき、非常にありがたく感じました。また、運動生理学を専門としていらっしゃる先生方にもお越しいただき、議論する機会を頂いて大変勉強になりました。体育学会は異分野交流ができる非常に貴重な機会だと改めて感じました。

最後になりましたが、残暑厳しいなか、学会開催にご尽力いただきました静岡大学の先生方や関係者の皆様にお礼申し上げます。

大会参加記

幾留沙智（鹿屋体育大学）

「体育・スポーツは今、次世代に何ができるか－2020後を見据えて－」というテーマが掲げられた日本体育学会第68回大会への参加は、まさに体育・スポーツに携わる自分自身に何ができるのかを改めて考える大変有意義な機会となりました。

「スポーツ庁のビジョンと日本体育学会への期待」と題して一般公開で行われた初日の特別講演には鈴木大地長官が登壇され、平日の午前中にも関わらず会場のホールは開始前から人で埋め尽くされており、体育・スポーツのもつ可能性・役割に学会内はもとより学会外からも大きな関心が寄せられていると感じました。講演では、女性スポーツや大学スポーツ等の様々なカテゴリ毎に、現状を示す数値、それに基づく未来の数値目標、そして、それを達成するための具体的な政策が説明されたのち、「エビデンスに基づく政策の提言」や「エビデンスを活用した広報発信」という学会への期待が述べられました。これまで、まるでどちらか一方しか選ぶことができないような、研究と実践の間で葛藤する感覚に陥ることがありましたが、求められているのは「研究に基づく実践」であると改めて気づかされ、実践から得た種を基に研究を推進できているのか、研究成果を実践に還元することはできているのか…と自分自身の研究活動について自問する貴重な時間となりました。

さらに、2日目以降の体育心理学専門領域のキーノートレクチャーへの参加により、自問は一層深まることとなりました。山梨大学の木島章文先生による「協応秩序の切替えにみられる体育－徳育融合のかたち」では、複数の人が同時に移動する際のデータから、隣に移動スペースを保有する人が先導して動くという自然発生的なルールの下で衝突の無い秩序立った移動が可能になること等が示されていました（間違っていたらすみません）。そしてこのようなルールは、人との関わりや集団や社会との関わりといった徳育で掲げられるテーマに沿った内容であるという体育と徳育の融合の可能性が述べられていました。これまでの自身のエビデンスは、果たして体育・スポーツを超えて異なる領域に重要な示唆を与えることができるのか…という悶々とした自問は今なお続いています。

中部学院大学の鈴木壯先生による「身体の動きの語りとこころ」では、選手の実際の語り等から、身体とこころは一方がもう一方の原因になるような因果関係にはなく、共時的に存在しているため、身体の動きに関する語りからその背後にあるこころの流れを理解することができると述べられていました。多様な側面から人の理解を試みる体育心理学の奥深さに改めて気づかされた一方で、単純な因果関係を想定してしまってはいないか、どちらか一方の狭い視点から人を捉えようとしてはいないか…と悶々と自問したのは言うまでもありません。

以上のように、たくさんの自問の機会をいただいた学会でしたが、この参加記を書きながら、悶々としただけで終わらせてしまうことが無いよう、ビジョンをもったハードワークに徹していかなければならないという重要な気づきを得ることができました。最後に、大会を運営してくださった先生方、こうして大会参加を振り返る機会をくださった先生方に心より感謝申し上げます。

学会発表支援金採択者　大会参加記

日本体育学会に参加して

下窪拓也（筑波大学大学院）

まず初めに、この度は参加助成金を支給してくださったこと、深くお礼申し上げます。国内で開催される学会とはいえ、交通費や宿泊費など学生にとって小さくない負担でしたので、今回のような支援は大きな助けとなりました。さらに、助成金対象者に採択していただいたことで、一層研究へのモチベーションも高められました。若手研究者のさらなる活躍を促進するためにも、修士学生の学会への参加を促すためにも、参加助成が今後とも継続されて行くことを願います。

さて、現在私が取り組んでいる研究についてご紹介させていただきます。2000年以降スポーツを通じた開発と平和を目的とする活動が活発に行われてきました(Schulenkorf, Emma, & Katie 2016, Schulenkorf, Sherry & Phillips 2016, Sugden & Bairner 2000)。特にスポーツは、人種間、民族間の対立がある社会において、集団間の関係性を向上させるアプローチとして大きな期待を受けています。しかしながら、スポーツを通じた関係構築の有効性について実証性の不足が指摘されてきました（Schulenkorf 2009)。私の研究では、社会心理学の観点からGordon Allport (Allport 1954) が提唱した「接触仮説」に則りスポーツを通じた集団関係の構築の有効性を議論していきたいと考えています。本学会のポスター発表では、スポーツ参加者間での接触を量的に測定する質問紙の検討結果について報告させていただきました。しかし、まだまだ検討を重ねる必要があるという結論に至り、今後の課題を多く残す結果となりました。

今回は、ポスター発表にて報告させていただきました。初めての学会参加ということもあり初めは勝手が分からずいましたが、自ら積極的に声をかけて行き、参加者の方々も快く議論に応じてくださったため、なんとか意見を交わすことができました。私の研究のように、スポーツを通じた異文化集団間の対立の解消を課題とした研究は他に見られませんでしたが、スポーツクラブ、部活内でのコミュニケーションを対象としている研究は幾つかあり、その研究者の方々とお互いの研究に対する意見を交換出来ました。特に、日本体育大学の先生が研究されていた、スポーツ教室を通じた視覚障がい者のソーシャルキャピタルの構築と、東京成徳大学の先生が研究されていた、競技レベルの違いによる選手のコミュニケーション能力の差異についての研究は、接触仮説とはちがう視点でスポーツを通じた人間関係の構築を捉えており、非常に参考となりました。反省点としては、あまり多くの方と議論を交わせなかったことが挙げられます。上述のように、ポスター発表の勝手がよく分かっていなかったことに加え、私の研究内容、ポスターの構成の未熟さも相まってか、想像していたよりも少人数としか話し合えなかったことが悔やまれます。今後の学会発表のためにも、より多くの人の注意を引ける発表方法を習得する必要性を感じました。

大きな不安を抱えたまま臨んだ本学会では、議論を通じて、新たな知見や、研究者の方々と出会えたことが何よりの成果だったと言えるでしょう。様々な研究者が集う学会という場は、自身の研究の立ち位置を見直し、視野を広げ、研究を深く掘り下げて行くための絶好の機会となりました。早い段階から学会に赴き、多くの研究者の方々との交流を持つことは、若手研究者にとって非常に重要なことではないでしょうか。以上のことからも、若手研究者への学会参加を促す助成は重要となるのではないかと感じます。

Gordon W.A.1954 The Nature of Prejudice, ADDISON-WESLEY PUBLISHING COMPANY,INC

Schulenkorf,N. (2009). An ex ante framework for the strategic study of social utility of sport events. Tourism and Hospitality Research,9(2),120-131.

Schulenkorf, N. Emma S. and Katie R. (2016) GLOBAL SPORT-FOR-DEVELOPMENT CRITICAL ISSUES IN GLOBAL SPORT MANAGEMENT Schulenkorf N. Stephen F.(ed) pp176-191 Routledge Taylor& Francis Group

Schulenkorf N. Sherry E. & Phillips P. (2016) What is sport development, MANAGING SPORT DEVELOPMENT An international approach (eds) Emma Sherry, Nico Schulenkorf and Pamm Phillips pp3-11

Sugden, J., & Bairner, A.(2000). Sport in divided societies. Meyer & Meyer Sport.

学会発表支援金採択者　大会参加記

日本体育学会に参加して

梶内大輝（法政大学大学院）

この度は、日本体育学会の参加助成に採択して頂きありがとうございます。

9月8～10日（金～日）にかけて、静岡大学にて開催された日本体育学会第68回大会に参加致しました。2015年から本学会大会に参加していましたが、初めて発表をするということでこれまでの参加とは異なった緊張や不安とともに楽しみを心に抱きながらポスター発表をさせて頂きました。

私の研究は、高校運動部員を対象とした礼儀・マナー尺度の開発をテーマとして取り組んでおります。本学会大会の発表では研究の第1段階として行った、礼儀・マナーを構成する因子の抽出について発表致しました。

調査内容、分析方法については、「運動部活動場面における礼儀・マナー」と「運動部活動以外その他の生活場面における礼儀・マナー」の2つの側面について大学1年生を対象に高校時代を振り返ってもらい、自由記述の調査を行ってKJ 法を用いて項目をまとめ､カテゴリー化して因子を抽出した結果、各側面ともに3因子ずつを抽出しました。

まず、「運動部活動場面における礼儀・マナー」では、あいさつや道具の使い方などの「他者や周囲の物や環境に対する配慮」、チームメイトや顧問の先生への行動などの「他者に対する尊敬の心や敬意を持った行動」、試合会場での行動や対戦相手に対する行動などの「試合・大会場面に関する礼儀・マナー」を抽出しました。この側面では、部活動の練習や試合場面､道具や練習環境の利用に関する礼儀･マナーが見られました。また、対人関係では先輩後輩や指導者・スタッフと選手の関係における礼儀・マナーも多く見られました。

一方、「運動部活動以外その他の生活場面における礼儀・マナー」では、他者の気持ちを察する行動や思いやりを持った行動などの「他者に対する配慮」、お礼や謝罪、言葉遣いなどの「他者に対する言語や行動」、電車やバスの車内マナー、学校内でのマナーなどの「道具や場所に対する礼儀･マナー」を抽出しました。この側面では、教員、友人との関わり方などの対人関係の場面や公共の場所、交通機関、学校内などの学生が過ごす生活場面で起こりうる礼儀・マナーが多く見られました。

両側面の礼儀・マナーは、各々に特有の場面や行動が見られるが、両側面に共通した行動などが見られ、両側面がお互いに影響しあうことでそれぞれの礼儀・マナーの向上が見込まれるのではないかと考えられました。今後は項目を作成し、予備調査を通して高校運動部員を対象に調査を行い、尺度の作成及び信頼性・妥当性の確認を行います。

発表時、私のポスターにご興味頂き、抽出した因子の詳しい内容のご質問や本研究の次段階である項目作成において留意すべき点や自身の考察以外に両側面の関係性について考えられる構図など、たくさんの貴重なご意見を先生方、院生の方々から頂き、また他領域の方々からも頂いたご意見を参考にして今後の研究活動に反映し、より良い研究となるように取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、本学会大会において参加助成に採択して頂いたことは大変光栄でとてもありがたい制度でした。参加費や宿泊･交通費が多くかかってしまう中で、発表の後押しをして頂いたことにとても感謝しております。今後もこの助成制度を続けて頂ければと思います。採択して頂き誠にありがとうございました。

学会発表支援金採択者　大会参加記

日本体育学会に参加して

上田遥菜（奈良女子大学大学院）

私は、身体表現を主とした身体活動時のイメージ想起を研究テーマとし、身体活動の習得時に想起されるイメージがどのように変容するかの検討、及びトレーニングとして有用とされている一人称的運動イメージの想起を促す方法を見出すことを目標に研究を行っています。このテーマは、私自身が長年ダンスを行っており、一連の全身動作が自分の身体に馴染み、自分のものとなるプロセスに興味を持っていることに端を発しています。

イメージ想起を検討する方法として、メンタルローテーション（MR）を用いています。MRは、頭の中で思い浮かべたイメージを回転操作する心的活動であり、身体部位を用いたMRでは運動イメージが関与することが明らかになっています。そのような特性を持つMR課題を用いて、身体部位の違いや個人の認知スタイルによるイメージ想起の相違に焦点を当て、身体活動の習熟に伴うイメージ操作の変容やイメージトレーニングとしての有用性を検討しています。また、今後は発達段階における運動イメージ想起にも着目し、運動技術の習得の一助としていきたいと考えています。

本学会第68回大会では、「課題動作習得に伴うイメージ操作の変容-メンタルローテーション課題を用いて-」という題目で、ポスター発表を実施しました。通常、ダンスなどの課題動作習得時には、示範者によって呈示された課題動作を、学習者が模範することによって学習が進められます。動作の習熟に伴い、主観的なイメージだけでなく，自身が動いている様子を俯瞰的にイメージすることが可能になると考えられるため、本実験では、課題動作の習得に伴うイメージ操作の変容について検討することを目的としました。ダンスの専門的な技術を含まない8カウント×4フレーズの課題動作を作成し、課題動作から抽出した刺激写真を用いたMR課題を実施しました。被験者の女子大学生6名に対し、視覚的なイメージを持つことがないよう、実験者の口頭説明による課題動作習得を行いました。MR課題は課題動作より左右非対称である動きの一部分を切り取った5種類の画像を刺激とし、実像と鏡像について、それぞれ奥行き回転させた6角度の画像を呈示しました。課題動作の習得及び練習とMR課題を1試行として4試行実施し、その結果、実施される動作の向きに関わらず対面となる角度で反応時間が延長し、エラー率は上昇する傾向がみられました。また、第2試行以降に反応時間が短縮する傾向が認められました。以上の結果から、背面の角度の認知は学習初期において容易であり、課題動作の習得に伴い多様なイメージ操作が容易となることが示唆されました。今後は、個人の認知スタイルの違いによる習熟やMR課題への影響について研究を行っていきたいと考えます。

最後にはなりましたが、この度は、体育心理学研究領域事務局様の大会参加助成に採択いただき、深く感謝申し上げます。また、本制度に携わっていただきました関係者の皆様方に重ねて御礼を申し上げます。本年は開催地が遠方であり、交通費や宿泊費等の支出が嵩むなか、助成金を受給いただけましたこと、大変心強く、研究発表に専念することができました。本学会大会は、様々な開催地にて開催されることから、今後もこのような制度を続けていただき、大学院生が研究発表の機会をより多く得られるよう取り組んでいただけましたら、大変うれしく思います。

学会発表支援金採択者　大会参加記

日本体育学会に参加して

村川大輔（鹿屋体育大学大学院）

私は日本体育学会第68回大会において、修士論文で取り組んでいる研究の一部をポスター発表させて頂いた。サッカー選手において重要となる状況判断には、選手が保有するプレーに関する知識量が影響を与えているが、その知識量は熟練者間において差がないことが報告されている。しかし、実際のプレー場面では競技経験を重ねプレー知識を同程度保有している熟練サッカー選手間においても判断能力に差が見られることから、熟練者間における判断能力の差には他の要因が関与している可能性がある。優れた判断を行う選手に判断に至った経緯を説明できない事例が多く見られることや、サッカーでは全ての情報を意識的に認識することが困難である点から、意識的に認識できない情報も判断に関与している可能性があると考えた。これらのことから、修士論文では閾下の情報処理が熟練者間における競技レベルによって異なるか、また、閾下の情報が運動反応に影響を与えるかについて大学サッカー選手を競技レベルに応じて3群（高群・中群・低群）に分類し検討することを目的としている。

今回の体育学会では、修士論文の一部である閾下の知覚と競技レベルの関係性について発表を行った。実験参加者は10年以上の競技歴を有する大学サッカー選手29名であった。方法として、逆向マスキング課題を用いて3vs3場面を17ms、34ms、51ms、68ms、85msの5条件で呈示しフリーな場所を選択させると同時に、どの程度画像を意識的に認識したかを測定するため回答に対する確信度を25%（全く分からない）～100%（完全に分かる）の範囲内で回答させ、各呈示時間における確信度と正答率の比較を行った。結果として、呈示時間の増加に伴い確信度が増加している一方で、17msと34msにおける確信度は全ての群において30%以下と、ほとんど意識的な認識がなされていない結果であった。しかし、意識的にほとんど認識されていなかった34ms情報の正答率に着目すると、高群と中群においては有意にチャンスレベルを超えて正答していることから、熟練者の中でもより競技レベルの高い選手は意識的に認識していない情報を正確に判断している可能性が示唆された。現在は、体育学会で発表した結果をもとに、閾下で知覚した情報が運動反応に影響を与えているかについて検討を行っている。

今回の学会参加・発表は多くの先生方からご指導を頂くことができ、普段とは異なる視点からもご意見を頂くことで思考の幅を広げることができた非常に有意義な時間であった。初めての学会参加であったが、自身の考えをまとめ分かりやすく伝えること、また普段お会いできない先生方からご指導頂けることなど、学会に参加することの重要性を感じることができた。その点において助成金制度はより積極的な学会参加を可能にすると共に、研究のモチベーションという点においても助成金制度は有効であると考える。

最後になりますが、日本体育学会第68回大会への参加・発表にあたり参加助成を採択して頂きまして有難うございました。

学会発表支援金採択者　大会参加記

日本体育学会に参加して

前田凌汰（大阪体育大学大学院）

今回私は初めて学会にて研究発表する機会をいただきました。今回の私の発表題目は「セルフトーク（ST）が児童の運動パフォーマンス及び課題中のストレスに及ぼす影響」でした。本研究では、児童29名を対象に10分間のランニング課題を行い、1回目に統制条件、2回目にST条件で行いました。その結果、走距離に差がなく主観的運動強度得点がST条件で有意に低かったことから、同距離を走る上で、楽に感じることが示唆されました。さらに、小学生用ストレス反応尺度の下位因子である、無気力、抑うつ・不安の値もST条件で有意に低下しました。今回の課題は児童にとって単調な運動ですが、STの使用により無気力感情を改善できたといえます。また、抑うつ・不安は中高生を対象に行った先行研究と一致しており、STは年代に関わらず抑うつ・不安に対して効果的であると考えられました。

今回の学会では初めて口頭発表をさせていただくこととなり、発表直前まで緊張しておりました。しかし発表終了後、緊張が安堵へ変わり、少しの達成感とさらなる研究への意欲がわいてきました。発表をさせていただいて難しいと感じた点は、スライドの切れ目の部分でした。私はスライドが切り替わってから話し始めていましたが、ほかの先生方の発表を拝見させていただくと、スライド間にうまく接続語などを入れて発表されていて、発表に硬さがなくスムーズに行われていました。そして発表の内容も頭の中に入ってきやすく、発表の内容だけでなく、発表の技術も重要だと学ぶことが出来ました。

また、100名以上の研究者の方々の前で口頭発表させていただいたことは、私にとって大きな自信となり、普段では感じることのできない貴重な経験なりました。質疑応答の時間や発表終了後、多くの先生方にご指導していただきました。この場をおかりして、感謝申し上げます。先生方に様々な観点からご指導していただき、自分の未熟さを感じながらも、まだまだこれから知識を深め、研究者として日々研鑽を積んでいこうと考えております。自分の研究していることを発表して、研究者としてスタートラインに立てた気がしました。

今回の学会は、多くの様々な研究者の方々とお話しさせていただく機会があり、私にとって大変刺激となりました。日々取り組んでいることを発表するこのような場の重要性を感じました。また、発表・質問することが知識だけでなく、人脈などの輪が広がり、自分の研究をさらに発展させるきっかけになると感じました。そのような点からも、学会に参加することの意義や重要性を心から感じることが出来ました。また来年度も発表するために、努力していきたいと思っております。

最後に、今回日本体育学会の参加助成を採択していただき、感謝申し上げます。今回の助成金により経済的に多大な援助をいただきました。私は学生なので、学会に参加したくても関西圏から出るとなると、やはり経済的に何度も簡単に参加できる状況ではありません。このような制度は、我々学生には有難く、学会参加のモチベーションを大きく高めていただけました。このような制度は、ぜひ今後とも続けていただきたく思います。

学会発表支援金採択者　大会参加記

日本体育学会に参加して

藪中佑樹（大阪体育大学大学院）

第68回日本体育学会は、私にとって初めての学会参加であった。初めての経験の為、学会とはどんなものなのか、と期待半分不安半分といった気持ちであった。大会1日目、大阪から新幹線に乗り東静岡駅で降りて、静岡県コンベンションツアーセンターに向かった。そこではスポーツ庁長官の特別講演や様々なシンポジウムなどで、日本の体育スポーツ界の抱える問題や未来像についてのお話を聞かせて頂いた。大会2日目、場所を静岡大学に移し、ポスター発表や山本先生、木島先生によるキーノートレクチャー、口頭発表に参加させて頂いた。大会3日目では、土屋先生、澁倉先生、煙山先生、荒木先生によるシンポジウム、鈴木先生、武田先生によるキーノートレクチャー、そして口頭発表にて自身の研究内容を発表させて頂いた。

口頭発表では、「競技スポーツにおける不安・緊張を和らげるユーモア表出に関する研究」というテーマで発表させて頂いた。スポーツ場面ではチームメートや指導者がユーモアを用いて、緊張し不安になっている選手を笑わせ、不安や緊張を和らげようとする姿が見られる。そこで私は、そのようなユーモアはどのような種類に分けられるのか、そしてそのユーモアの効果に個人差があるのか、という内容について発表させて頂いた。プロジェクターの前に立つまではずっと緊張していて、発表がうまくできるかとても不安であった。発表の際には多くの先生方にお越し頂き、光栄であると感じる一方で、いい加減な発表はできないと身が引き締まる思いだった。質疑応答では、データの分析方法と、ユーモアによって不安・緊張が和らぐメカニズムについての質問を頂き、今後の研究に大きな示唆を与えて頂いた。

学会参加にあたっては、参加助成金を頂くことが出来た。私などが頂いてもよいのかという思いもあったが、頂く以上はしっかりした発表を行う必要があると、責任感を持って取り組ませて頂いた。大学院生にとって自身の活動拠点から遠く離れたところでの学会に参加することは金銭面で大きな負担となるため、今回のこの制度により非常に助けられた。今後ともこのような制度を続けて頂けると、大学院生の学会発表の促進につながるのではないかと思う。

また、大会を通して様々な先生方の講義を聞かせて頂いたが、どれも体育スポーツ界の過去とこれからの在り方について深く考えさせられる内容であった。体罰問題や指導者の資格制度の整備など、保健体育の教員を経験したことのある私にとってとても身近な問題に感じる。その解決のためには、まずは指導者が現状を知ったうえで、全員が少しずつその解決に向けて行動していくことが大切であると感じた。

この日本体育学会に参加した経験は、私の大学院での研究生活や今後のスポーツに関わる取り組みに大きな影響を与えてくれた。現在の研究テーマは競技場面のユーモアとは異なり、大学運動部活場面の自己効力感とその般化について研究を行っているが、今回の口頭発表で経験した緊張感や質疑応答で質問して頂いた内容、発表に至るまでの準備は今後の研究生活に必ず生きてくるように思う。また、様々な先生方の講義を通して得られた知見は、今後の私のスポーツに関わりながら生きていく人生において避けては通ることのできない内容であると思う。来年の日本体育学会も是非参加し、多くの知見を得る機会にしたい。

Ⅱ．研究会の活動報告

スポーツ社会心理学研究会　活動報告

杉山佳生（九州大学）

前年度（平成28年度）は、福岡大学で行われた九州スポーツ心理学会に合わせて、ディナーミーティングの形で例会を行いましたが、今年度（平成29年度）は、九州スポーツ心理学会が佐賀での開催となり、例会を行う場所や日時の調整がうまくいかず、（人知れず）悩んでおりました。そんな折、後述する、九州大学で開催される（ミニ）シンポジウムが、社会心理学的テーマを扱い、また、本研究会のメンバーも登壇するということを知り（正確には、「突然、気づき」）、これ幸いと、その企画に便乗させてもらうことにしました。具体的には、このシンポジウムにスポーツ社会心理学研究会として参加し、その後に、振り返りも含めて、（懲りもせず）ディナーミーティングを行うことにしました。

参加したシンポジウムというのは、私、杉山が所属する九州大学大学院人間環境学府で行われている「多分野連携プログラム」（異なる領域の教員が集まって、教育研究にかかる学際的な取り組みを行おうという活動）の中の「共生社会のための心理学」というグループが、毎年、年度末頃に行っているもので、大学院生を中心とした若手研究者が研究等の発表を行っています（ちなみに、多分野連携プログラムのグループは、平成29年度は5つあり、「遊び」、「通学路」、「進化」などが学際的に探究されています）。この「共生社会のための心理学」グループには、本研究会のメンバーである内田若希先生（九州大学）が入っていることから、「研究会」としての参加を決めたのですが（当初は、こっそりと参加する予定だったのですが、いつの間にか、「共催」になっていました）、このグループには、PM理論を提唱された三隅二不二先生の流れを汲む九大社会心理学研究室の池田浩先生や、動作法で有名な成瀬悟策先生の流れを汲む九大臨床心理学研究室の古賀聡先生もいらっしゃり、実は、体育・スポーツ心理学とは縁も所縁も「深い」グループでありました。

シンポジウムは、「個と集団」というテーマを掲げ、2018年3月9日（金）13時～17時に、九州大学箱崎キャンパスの文学部会議室で行われました。発表演題は、「仕事における他者志向の効果」、「スポーツ指導者の『集団』を考慮した『個』へのアプローチ」、「男性の育休取得を阻んでいる一因とは？」、「進化心理学の視点から考える第三者罰」、「ファミリー・グループにおける参加者の心理的プロセスに関する研究」、「発達障碍のある人への支援における『個』と『集団』」と多岐にわたっており、このうち、2番目の発表が、本研究会のメンバーである神力亮太先生（常葉大学）によるものでした。神力先生の話題も含めて、いずれも大変興味深い内容であり、私個人にとっては、「あっという間の4時間」ということになりました（全体討議では、なぜか、神力先生の話題に基づく議論で、盛り上がっていました）。

シンポジウムへの参加者は30名弱でしたが、本研究会からは、瀧豊樹先生（日本経済大学）、河津慶太先生をはじめ、10名が参加しました。この後に行われたディナーミーティングには、磯貝浩久先生、秋山大輔先生（共に九州産業大学）にも加わっていただき、シンポジウムの振り返りと、スポーツ社会心理学研究の今後についてのざっくばらんな意見交換を行い、「ついでに」懇親も図りました。

以上のように、平成29年度も、なんとかイベントを行うことができたのですが、福岡での実施が多く、また、形に残ることもあまりできていないということで、今後は、オリパラムーブメントや「改元」などを誘因にして、少しでも活動を活性化できればと考えているところです。皆様のご支援・ご協力・ご参画を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

スポーツ社会心理学研究会事務局
杉山佳生（九州大学大学院人間環境学研究院）
sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会　活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会（ISMTE）と国際応用スポーツ心理学会（AASP）をモデルに、1994年にスタートし、現場での実践を目的とした情報交換会を全国各地で開催している。本研究会は、初期のころは、スポーツ心理学の専門家を中心にした研究会で立ち上げたが、当時は現場での実践研究やメンタルトレーニングに興味を示す研究者が少なく、現場の指導者や選手が興味を示し、研究会に参加するようになった経過がある。ここでは、スポーツメンタルトレーニング指導士・上級指導士やその資格を目指す学生たちが情報・話題の提供をし、選手や指導者が現場で実践してもらい、その結果をまた研究会で報告するという理論（研究）と実践（現場）のキャッチボールを目的としている。

2017年度は、東海大学研究会が毎週1回の開催をし、さらに関東地区、愛知県、栃木県の各研究会が毎月1回の開催、中京地区が年数回の講習会を開催した。北海道支部会では、4月に旭川支部講習会、5月に札幌地区講習会、12月に帯広地区で2日間講習会を実施した。

情報収集活動としては、研究会のメンバーが米国フロリダ州オーランドで開催された国際応用スポーツ心理学会（AASP）に8名が参加し、世界的な情報の収集をし、その報告を研究会で行った。ここでは、多くのキーノートレクチャー・シンポジウム・ワークショップ・口頭発表・ポスター発表が行われた。特に、興味深いものは、メジャーリーグ23球団で40名以上のスポーツ心理学者が心理的サポートをしているという話題であり、メジャーリーグやプロスポーツに関わるスポーツ心理学者たちの組織までできて、毎年集まり情報交換をしているというものであった。

一方、毎月開催される関東地区や毎週開催の東海大学研究会では、自己紹介を兼ねた情報交換が30分程度行われ、その後は参加者が現場での問題点やメンタルトレーニングの実践例やその効果等を持ち寄り報告し、ディスカッションをしている。また主催者側からの話題提供が行われ、同時にいくつかの心理的スキルや実践例に対してディスカッションが行われている。さらに、スポーツメンタルトレーニング上級指導士の資格取得者からの話題提供や現場での実践例が報告されている。加えて、参加者の選手やコーチからの報告や話題提供、映像による試合や練習場面での報告からグループを作りディスカッションなどが盛んに行われている。研究会後は、懇親会等で参加者同士によるさらなる情報交換が毎回行われている。

本年度の特別ゲストには、ユニバーシアード男子サッカー日本代表監督の宮崎純一（青山学院大学教授・サッカー部部長）による代表のメンタルトレーニングや心理的サポートの取り組みが紹介された。またユニバーシアード後の優勝報告とその経過も報告された。同時に、このチームのメンタルトレーニングコーチ（スポーツメンタルトレーニング上級指導士）による、2年間のメンタルトレーニングの取り組み、チームや選手に対する心理的サポートの内容も報告された。さらに、選手たちが試合前に見たモチベーション映像なども披露された。

本研究会は、現場のコーチや選手の参加が多いため現場での実践、競技力向上を目的とした情報交換（研究・理論と現場・実践のキャッチボール）が盛んに行われている。もちろん、大学の研究者、医者、歌手、臨床心理士、栄養士、体育協会関係者、中学・高校・大学・プロ選手なども毎回参加し、広い角度からのディスカッションが行われている。

運動学習研究会　活動報告

奥村基生（東京学芸大学）

第26回運動学習研究会は2017年8月7日と8日に東京学芸大学で開催されました。今年は都市部での開催で40名の参加者、19の発表演題があり盛況でした。

発表は口頭発表のみ、一演題につき30分以上の時間が設定され、じっくりと議論されました。 表にあるように前半に主に大学院生が発表し、後半に有職者が発表しました。発表中や質疑応答の時間だけではなく、空き時間やナイトセッションにおいて熱い議論が交わされるのが本会の魅力の一つです。また、発表に対して首尾一貫して建設的な意見交換がなされるのが本会の伝統だと感じます。大御所の先生方も優しく（？）懇切丁寧に対応してくださるので、大学院生などの参加・発表は非常に有意義なものになると思います。

今年度の開催日程や場所は未定ですが、現会員だけではなく、大学院生や若い研究者にも新たに参加してもらい、今後も本会が継続・発展していくことを期待しています。

運動学習研究会 HP
http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/jmls/

発表者と発表演題（発表順）

発表者	所属	発表演題
高御堂良太	名古屋大学大学院	野球型競技における間合いに関する研究
奥村文浩	名古屋大学大学院	自転車競技ポイントレースにおける集団パターン形成
工藤璃子	名古屋大学大学院	理想的な待球位置からみたネット型対人競技の駆け引き
碓氷典諒	東京学芸大学大学院	剣道における攻防切替動作の分析研究
中野信泰	東京大学大学院	バスケットボールのシュートにおけるリリースパラメータのバラツキとパフォーマンスの関係
針山朋泰	慶應義塾大学大学院	トップラリードライバの視覚探索活動と熟達化について
筒井和詩	東京大学大学院	二者間競合課題における捕捉ダイナミクス
山本耕太	東京大学大学院	内在的な協調パターン間における適応可能性
山津幸司	佐賀大学	運動技能、体力および学業成績の関連性の検討
太田啓示	東京農工大学	競争課題における運動の意思決定
三浦哲都	早稲田大学	対人間の競合・協調ダイナミクス
横山慶子	名古屋大学	サッカーゲームのリズム
紅林亘	青森大学	合奏のテンポ加速現象に関する数理的な解析
岡野真裕	立命館グローバル・イノベーション研究機構	リズム同期課題における対人間協調のダイナミクス
倉松由子	東北大学	片麻痺者の動的姿勢制御における知覚運動適応　視覚制約下での感覚（入力）系損傷者と運動（出力）系損傷者のふるまい
田中美吏	武庫川女子大学	投げの正確性：プレッシャー研究やイップス研究への援用
國部雅大	筑波大学	運動課題中の瞳孔径と素早く正確な反応の関係
木島章文	山梨大学	他者協応動作の発達
工藤和俊	東京大学	運動学習の階層性

臨床スポーツ心理学研究会　活動報告

中込四郎（国士舘大学）

本会の主要な活動は、年1回・1日半の研修会開催、そして年1～2回の会員向けニュースレターの発刊です。研究会では、通常の学会発表とは大きく異なり、時間をかけてスポーツ現場でのサポート事例の詳細な報告がなされ、それをじっくりフロアーの参加者は味わい、そして様々な視点からの質問、感想、意見を発表者に投げかけ、事例の深い理解を双方が目指します。これは私たちの研究会設立の背景そして独自性でもあり、今後もこのスタイルを継承していくことになります。第4回臨スポ研究会のプログラムは次の通りでした。（以下、敬称略）

10月8日＜司会：武田大輔（東海大学）＞

① 13：00～15：30：事例検討

事例提供者：秋葉茂季（国士舘大学）

題目：繰り返し同じ箇所を怪我したアスリート

指定討論者：鈴木　壯（中部学院大学）

② 15：45～17：45：レクチャー

演者：伊藤宗親（岐阜大学）

題目：カウンセリングはなぜ効くのか

＜18：45～20：45：懇親会＞

10月9日＜司会：坂本昭裕（筑波大学）＞

③ 9：00～11：30：事例検討

事例提供者：浅野友之（武蔵大学＜非＞）

題目：2019茨城国体での実力発揮を目指す競技団体のメンタルサポートの事例

指定討論者：中込四郎（国士舘大学）

④ 11:30～12:10：報　告

報告者：神崎絢子（国士舘大学）：

題目：ユング研究所公開講座参加体験から

以下では、これらのプログラムに基づく研修内容について若干の説明を行っていきますが、守秘義務や報告者の主観（印象的な内容）を交えることから、内容に偏りのあることを断っておきます。

秋葉先生の事例は、ある個人種目で国内トップクラスの企業チームから所属選手の心理サポートの要請を受け行われたものでした。クライエントは度重なる怪我によるパフォーマンス発揮や以前から望んでいた他種目へのスムースな移行を果たせずにいた。こうした問題の背景に、先を見通し組み立てることを苦手とする心性や幼少期からの万能感による物事への柔軟な対応や切り替えを苦手とする心理特徴が認められ、取り組まれていかれました。

浅野先生より報告されたもう一つの事例は、MT指導士が心理サポートの要請を受け、その後継続していくプロセスで参考となる展開でした。競技現場で自身が行ったサポート内容を記録する場合、面接室とは異なり大きな困難がある。氏の今回の検討資料は、今後MT事例の報告において参考になるまとめ方をしていたことや、指導スタッフとの関係づくりの仕方が強く印象に残っているものでした。

レクチャーを引き受けていただいた伊藤先生には、「カウンセリングはなぜ効くのか」とのテーマからお話いただきました。内容を一言でまとめることはではきませんが、「カウンセリングは未だ形になっていないもの（語り得ぬもの）に形を与えていく作業であり、“語る”ことによって形が備わる。それには、聴き手の存在が大きい」との語りが強く印象に残っています。先生のお話からは、タイトルの“効く”には、“カウンセリングはなぜ聴くのか”といった両方の意味も込められていたのかもしれません。

プログラムの最後は、神崎先生より今夏、スイスのユング研究所での公開講座での体験をお話いただきました。本研究会の会員の中にはユング心理学に関心の深い方が多く、とても刺激的な内容でした。

次年度もまた、日本の真ん中に位置する岐阜での第5回開催を約束し、お開きとなりました。

スポーツ動機づけ研究会　活動報告

藤田　勉（鹿児島大学）

スポーツ動機づけ研究会は、会員の研究報告の場を提供するとともに、会員相互の情報交換を図るため、平成29年8月28日、29日、30日の3日間にわたり、第15回目の研究会が愛知学院大学日進キャンパスの学院会館及びけやきテラスにおいて開催され、合計35名の参加者で活発な意見交換が行われました。

本年度は、個人発表とシンポジウムで構成されました。主な内容は、以下の通りです。

個人発表
- 保護者の運動遊びに対する認識と幼児の運動能力（名古屋経営短期大学・武田 直之）
- マルチレベル分析で見えてくるもの（新潟大学・森 恭）

シンポジウム
- 動機づけ雰囲気研究の現状と今後の展望（兵庫教育大学・中須賀 巧、鹿児島大学・藤田 勉）
- 動機づけを高めるコーチング（日本スポーツ振興センター・永尾雄一、防衛大学校・小圷 昭仁、北星学園大学・蓑内 豊）
- 青少年スポーツ活動の推進における動機づけ研究の貢献（九州産業大学・磯貝 浩久、桐蔭横浜大学・渋倉崇行）
- 動機づけ再考（日本大学・北村 勝朗、日本女子大学・杉山 哲司、愛知学院大学・西田 保）

個人発表は、2つと少なめでしたが、武田先生からは、データを収集され、分析された結果についてご報告がございました。興味深い研究結果に加えて、幼児の運動能力のデータを収集する難しさを教わりました。また、森先生からは、マルチレベル分析の可能性についてのご講義があり、データを分析する視点の奥深さを学びました。

本年度は、中堅研究者が積極的に話題提供することが重要視されたため、4つのシンポジウムが組まれ、それぞれに活発な議論が展開されました。

中須賀先生からは、体育授業における動機づけ雰囲気の研究成果と今後の展望について発表がございました。同じ研究テーマに取り組む私とは異なるデータを持っているため、勉強になるばかりでなく、頼もしい研究者がいることを確認できました。

永尾先生、小圷先生、蓑内先生からは、動機づけを高めるための実践報告があり、なぜ、そのような実践をするのかという根拠に加えて、実践に向けての用意周到な準備が必要であることを教わりました。

磯貝先生からは、心理指標をはじめとするパフォーマンス関連の指標を管理するソフトの開発、ビッグデータとしての活用など、夢が膨らむ話題提供がございました。渋倉先生からはご自身の活動報告がございました。活動の範囲がとても広く、この紙面のみでは紹介しきれませんが、子どものみならず、保護者との関係構築を大切にされ、多くの活動に取り組まれております。研究と実践の両方に尽力する姿勢が伝わってきました。

最終日最後のシンポジウムでは、北村先生、杉山先生、西田先生により、動機づけ再考というテーマについて、国内外の研究動向並びにご自身の研究歴を踏まえて、今後の展望などをお話しされました。

以上の他にも、愛知学院大学内の坐禅堂にて座禅体験もあり、多様なプログラムが組まれました。会場の準備等では、西田 保先生（愛知学院大学）、今井 美希先生（至学館大学）、富士本 凌先生（誠信高等学校）に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

当研究会では、上記のような多様な内容とともに、口頭発表についてもショート版とロング版を用意するなど、できるだけご参加いただきやすい方法で行っております。ご興味をお持ちの多くの先生方のご参加を心からお待ちしております。

Ⅲ．研究室紹介

研究室紹介
首都大学東京人間健康科学研究科　知覚運動制御研究室（樋口ゼミ）

樋口貴広、福原和伸、井村祥子（首都大学東京）

1. 研究室の概要

私たちの研究室は、知覚運動制御研究室といいます。研究室がある建物（13号館）は、八王子市の南大沢キャンパスの中でも豊かな緑に囲まれたロケーションにあります。前理事長がＪリーグを牽引した川渕三郎氏であったことや、サッカーグラウンド・体育館・テニスコート等の運動施設が充実に整備されているなど、体育・スポーツ活動が身近にあるキャンパスと言えます。

研究室では、主に「知覚・認知（たとえば、視覚や体性感覚）から見た身体運動の理解とその支援」に関する研究を行っています[1)・2)]。教員３名（教授・樋口貴広、専門は実験心理学、助教・福原和伸、専門はスポーツ心理学、助教・井村祥子、専門はスポーツバイオメカニクス）、院生７名、研究生１名、客員研究員２名が、様々な研究アプローチから課題解決にあたっています。研究成果をスポーツやリハビリテーションに還元することを主眼としていることもあり、大学院生には、医療従事者（理学療法士、作業療法士、看護師）や運動指導士（高齢者、幼児対象）など、運動支援の現場で活躍する様々な社会人が所属してきました。こうした社会人と、現役で進学してくる学生とが、ゼミを通して情報交換を行うことで、特定の専門領域に偏らない客観的な議論ができる環境づくりを目指しています。

2. 知覚・認知が身体運動を変える

脳の情報処理過程における情報の入力（知覚・認知）と出力（運動）は、それぞれ独立して働くのではなく、両者が密接にリンクして機能します。そのため、知覚・認知が身体運動を劇的に変える切り口になることもあります。私たちはこうした考え方に基づき新たな運動学習・トレーニング法の確立に向けた研究を進めています。その成果を、スポーツ・ダンス・リハビリテーションの問題に応用させることが狙いです。

測定機材として、モーションキャプチャシステム（OQUS、カメラ16台）、視線行動を解析するアイマークレコーダ、可搬型フォースプレート、視覚情報を遮断するための液晶シャッターゴーグル、バーチャルリアリティ（VR）システムなどがあります。このほか、本学荒川キャンパスにあるfMRIの施設を利用して、運動模倣の研究を行った実績もあります。以下、代表的研究事例についてご紹介します.

2.1　一流選手の見る世界を疑似体験する（福原）

一流選手と私たちの違いは、単なる運動能力だけでなく、少し先の未来を正確に推察できる予測能力にあります。研究では最先端のVR技術を駆使して、対戦相手の次の行動や状況を予測する知覚・認知プロセスや、それに応答する反応速度の秘訣を明らかにすることを目指しています。

実際のスポーツ動作をモーションキャプチャし、それを忠実に再現したVR環境を用いて実験を行っています（図1）。対戦相手（アバター）の動きや周辺環境の視覚情報を絶妙に操作することで、実際のフィールドでは測れない熟練競技者の予測中の知覚運動反応を評価しています。最近では、テニス競技のボールコースを予測する場面において、熟練者は対戦相手の体幹付近から全体を俯瞰的に見ていることを明らかにしました[3)]。さらにこうした熟練パフォーマンスは、実際のプレー経験に依存的に発揮される可能性も分かってきました．このような知見を地道に積み重ねていくことで、「一流選手がプレー中に見ている世界を擬似体験できるVRシステムの開発」を目指しています。これが実現されれば、一流選手に近づくためのヒントを得ることができると考えています。

2.2　ダンサーはなぜ体幹が強いのか？（井村）

近年では「体幹トレーニング」、「骨盤調整」など、

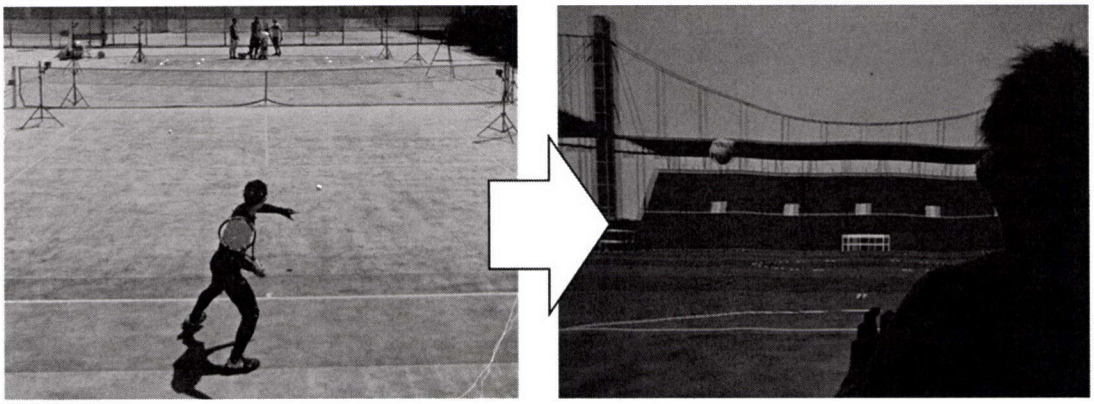


図1　球技スポーツを対象としたVR実験の例
（左）実環境でのスポーツ動作のモーションキャプチャ
（右）実データをVR環境に反映させた知覚運動反応計測の様子

体幹部に注目したトレーニングやコンディショニング法が注目されています。そもそもなぜ、体幹なのでしょうか？

スポーツ動作や立位・歩行等の日常的動作で見られるダイナミックな運動において、体幹の運動は体肢の動きの反作用を受けて成立しています。私は、クラシックバレエが前方にいる観客に体幹の前面を見せるように作られ、その位置のコントロールが厳格に行われていることに注目し、ダイナミックな運動中に行われている体肢と体幹の協調運動についての研究を行っています。研究はモーションキャプチャーシステムと床反力計で動作を計測し、全身レベルで詳細に動作解析を行うことが中心です。跳躍研究では、バレエでよくみられる下肢の外旋位により準備姿勢の骨盤の傾き具合が変わることや[5]（図2）、回転動作では上肢の回旋に対して上胴の捻りが重要であることがわかりました。



図2 下肢の配置の違いによる骨盤の傾き具合の違い

最近ではこのような見方を応用して、転倒予防のための身体コントロールについても研究を広げています。一般人がダンサーのごとく皆美しい動きをする必要はないかもしれないですが、「体幹のコントロール」は誰しも少なからず必要となる身体運動であるのかもしれません。

2.4　動きながらの状況判断（樋口）

競技スポーツの多くは、空間をダイナミックに動き回る要素を含みます。動き回れば、それに由来する雑多なノイズが感覚情報として混入するはずです。にもかかわらず、座位時や立位時よりも正確に状況判断ができる側面があります。なぜ動き回りながら正確な状況判断ができるのでしょうか。それを解明することが、樋口が行っている研究の狙いです。

この問題にアプローチするために、狭い隙間を通り抜けてもらう行動を測定しています。動きながらの状況判断においては、移動環境や他の競技者と自分自身との距離関係や空間関係を瞬時に計算することが求められます。隙間通過行動は、隙間幅（環境）と身体幅の空間関係に基づき、適切なタイミングで

接触回避行動をとる必要があります。その行動を詳細に検討することで、動きながらの状況判断を支えるプロセスの一端が解明できます。

隙間通過行動の研究は、アメリカンフットボール選手の密集突破力の理解[4]や高齢者や脳卒中患者の転倒危険性につながる判断力の問題解明に役立っています。また最近では、VR環境で隙間通過行動を作りました。VR環境は「ぶつかってもケガをしない環境」です。このシステムを利用して、高齢者の状況判断力向上に結び付けられるかを検討しています。



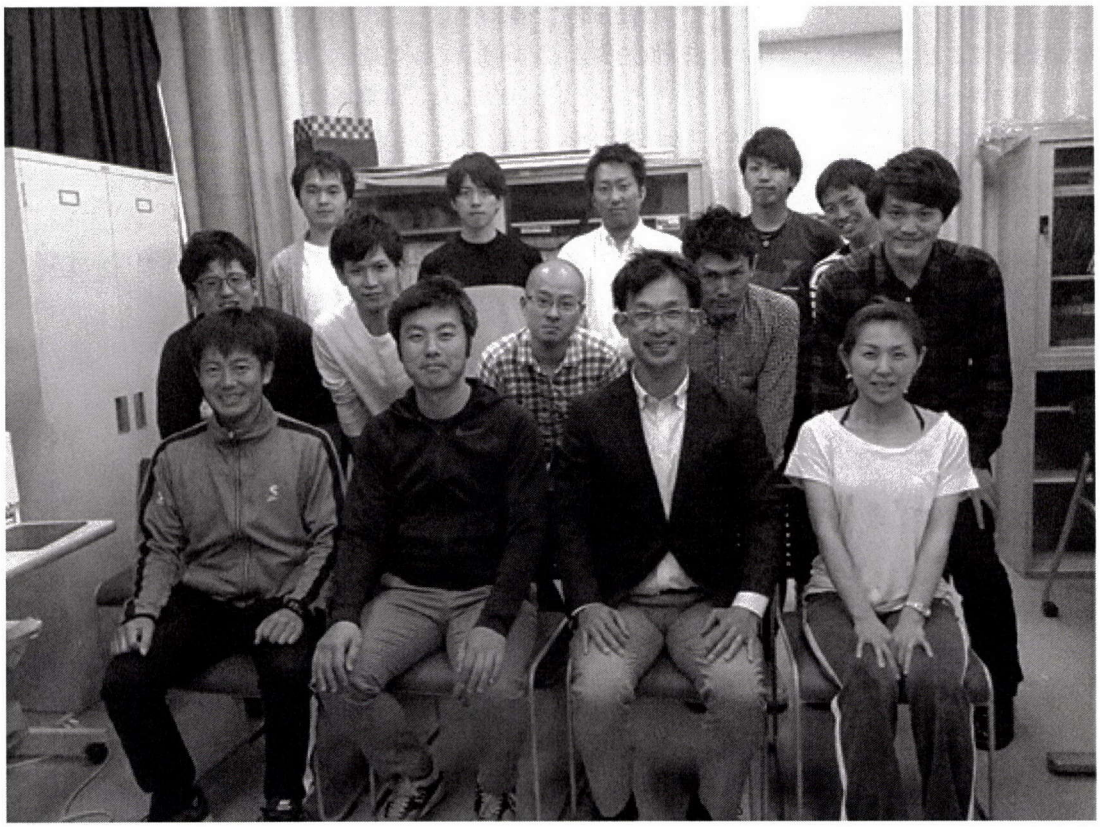
図3　隙間通過行動を用いた状況判断の研究例
（左）アメリカンフットボール選手の密集突破に関する研究
（右）VR環境下の隙間通過行動計測システム

3. おわりに

本研究室では今後も、知覚・認知に関する知識が、生理学的・生体力学的・解剖学的な知識と等しく、運動を理解する上で欠くことが出来ない知識であると広く認識されるよう努力します。スポーツだけに固執せず、運動の理解と応用に幅広い興味関心を持てる人材育成に努めます。樋口ゼミの最新の動向は、ホームページから閲覧可能です。何かの機会にぜひ一度お立ち寄りください。(http://www.comp.tmu.ac.jp/locomotion-lab/index.htm)

参考文献

1) 樋口貴広・森岡周：身体運動学－知覚・認知からのメッセージ. 三輪書店, (2008).
2) 樋口貴広：運動支援の心理学－知覚・認知を活かす. 三輪書店, (2013).
3) Fukuhara K., Ida H., Ogata T., Ishii M., Higuchi T.: The role of proximal body information on anticipatory judgment in tennis using graphical information richness. PLoS One, 12 (7): e0180985. (2017).
4) Imura A., Iino Y.: Comparison of lower limb kinetics during vertical jumps in turnout and neutral foot positions by classical ballet dancers. Sports Biomechanics, 14, 1-15, (2016).
5) Higuchi T., Murai G, Kijima A, Seya Y, Wagman JB, Imanaka K: Athletic experience influences shoulder rotations when running through apertures. Human Movement Science, 30, 534-549, (2011).



Ⅳ．学位論文紹介

スポーツ集団内における集合的効力感の評価形成過程に関する研究

内田遼介（法政大学スポーツ研究センター）
学位：博士（人間科学）、授与機関：大阪大学
取得日：2017年3月22日、指導教員：釘原直樹教授

本論文の背景と目的

集合的効力感とは、成員たちが目前の集団課題（試合など）に対してどれぐらい「私たちはできる」と予期しているかを表す心理的な構成概念のことである。これまで、様々なスポーツ集団を対象に数多くの実証研究が行われ、集団パフォーマンスに対して正の影響を及ぼすことが繰り返し確認されてきた（Feltz & Lirgg, 1998; Myers et al., 2004a; Myers et al., 2004b; Myers et al., 2007）。これらの知見は、集合的効力感がスポーツ場面で成功するための心理的要因になることを示唆するものである。ゆえに、集合的効力感を高めるための先行要因を明らかにする研究も数多く行われてきた（Chase et al., 2003）。なかでも、所属成員の集合的効力感を一律に上昇・低下させる効果を持つ最も強力な先行要因として、遂行行動の達成や熟達的な経験と言及される過去経験が報告されてきた（Chow & Feltz, 2007; George & Feltz, 1995; Zaccaro et al., 1995）。しかし、集団内部において、成員一人ひとりがどのように過去経験を解釈して集合的効力感を評価したのかについてはブラックボックスとして扱われてきた。スポーツ集団に所属する成員間で数多くの過去経験を共有しているとはいえ、全ての成員が同じような観点から過去経験を解釈して集合的効力感を評価していると想定するのは困難である。

そこで本研究では、集団内部において、成員一人ひとりがどのように過去経験を解釈して集合的効力感を評価しているのか、その過程を明らかにすることを主たる目的とした。そして、特に成員一人ひとりの評価過程が集合的努力モデル（Karau & Williams, 1993, 2001）における道具性（特に個人パフォーマンスと集団パフォーマンスの関係性の程度）の観点から説明できると予測した。具体的な仮説は以下の通りであった。

まず、道具性が低い成員（例えば、能力的に劣る選手など）では、過去経験から他者の貢献可能性（他の成員達がどの程度集団課題に貢献できるか）を経て集合的効力感を評価すると予測した。それに対して、道具性が高い成員（例えば、能力的に優れる選手、重要なポジションの選手など）では、過去経験から自己の貢献可能性（自分自身がどの程度集団課題に貢献できるか）を経て集合的効力感を評価すると予測した。加えて、過去経験から自己の貢献可能性を経て集合的効力感が評価された場合に限って、集団課題遂行時の行動に影響すると予測した。

本論文を構成する各章の概要

本論文の構成は8章からなる（ただし、第8章は要約のみ）。第1章では、スポーツ集団を対象とした集合的効力感の研究について概観するとともに、社会的影響過程に関する研究との接点について論じた。

第2章（研究1）では、集合的効力感の評価過程をフィールド上で検討するため、Short et al.（2005）のスポーツ集合的効力感尺度の邦訳版を作成した。

第3章（研究2）では、研究1で作成した尺度を用いて、集合的効力感の評価過程をフィールド上で検討した。その結果、二つの結果が得られた。第一に、道具性と課題遂行能力に対する自己評価に正の相関が認められた。第二に、課題遂行能力が優れていると自己評価した選手において、過去経験から自己の貢献可能性を経て集合的効力感を評価する過程が認められた。しかし、劣っていると自己評価した選手では、そのような過程は認められなかった。これらの結果は、道具性の差違から集合的効力感の異なった評価過程を説明できる可能性を示唆するものであった。

第4章（研究3）では、課題遂行能力の相対的な

優劣を実験的に操作して、研究2の知見を再検討した。実験課題には、3名1組の集団でワイヤーロープを60秒間、あらかじめ定められた基準値以上の張力で維持し続ける張力維持課題を用いた。参加者は、この課題を3名の中で最も能力的に劣った立場で取り組む劣位条件と、最も能力的に優れた立場で取り組む優位条件の2条件（参加者内計画）で行った。その結果、道具性が高いと想定される優位条件の時だけ、参加者は自己の貢献可能性に基づいて集合的効力感を評価した。

第5章（研究4）では、過去経験（集団課題の遂行結果）から集合的効力感の評価、そして次の集団課題の遂行に至るまでの一連の過程を検討した。実験課題には、3名1組の集団で、できる限り早くロードバイクをペダリングして2000mに到達するグループタイムトライアル（Greenlees et al., 1999, 2000）を用いた。2000mに到達するまでに経過した時間を計測し、優れた記録だった場合には賞品を進呈すると教示した。事前に個人課題（12秒間全力ペダリング）を行い、その記録に対して誤フィードバックを提示して、集団内での課題遂行能力の優劣（優位条件・劣位条件）を操作した。実験の結果、道具性が高いと想定される優位条件の参加者は、過去経験から自己の貢献可能性を経て集合的効力感を評価した。一方、道具性が低いと想定される劣位条件の参加者は、専ら過去経験だけに基づいて集合的効力感を評価した。また、自己の貢献可能性に基づいて集合的効力感が評価された場合に限って、集団課題遂行時の行動に影響した。

第6章（研究5）では、特定の実験操作に依存した結果ではないことを示すため、異なる実験操作を用いて一連の過程を再検討した。実験課題には、テンキーを使って、モニタ上に表示される3桁の数字を、できる限り速く、そして正確に10回入力するタイピング課題を用いた。この課題を、4名1組で一人ずつ順番に行うように求めた。そして、4番目の参加者が終了するまでに経過した時間を計測し、優れた記録だった場合には賞品を進呈すると教示した。参加者は、最初に遂行する条件（1番条件）、もしくは最後に遂行する条件（4番条件）のいずれかに参加者間計画で割り当てられた。実験の結果、道具性が高いと想定される4番条件の参加者は、自己の貢献可能性に基づいて集合的効力感を評価した。一方、道具性が低いと想定される1番条件の参加者は、過去経験だけに基づいて集合的効力感を評価した。また、自己の貢献可能性に基づいて集合的効力感が評価された場合に限って、集団課題遂行時の行動に影響することを明らかにした。

第7章では、これまでの結果を踏まえて総合考察を行った。本論文では、一連の研究によって、集団内部における集合的効力感の評価過程が道具性の観点から説明できることを示した。さらに、集合的効力感が自己の貢献可能性に基づいて評価された場合に限って、集団課題遂行時の行動に影響することを明らかにした。最後に、集合的効力感が真にその影響力を発揮するには、選手達に道具性が高いと認識させる必要があると提案した。

習得及び心理的プレッシャーが協力する2者間の躊躇と衝突に及ぼす影響

小川　茜（西日本短期大学健康スポーツコミュニケーション学科）
学位：博士（学術）、授与機関：広島大学
取得日：2018年3月6日、指導教員：関矢寛史教授

チームスポーツにおけるパフォーマンスの向上には、個人のスキルと共に、チームメイトとの連携といった個人間協応が重要である。しかし、例えばテニスのダブルスにおいて2人の間に打たれたボールを譲り合う（以下、躊躇）、または2人とも捕球しようとして衝突するという個人間協応の崩れを示す行動が時に起こる。これらはチームメイト間の協応における失敗行動といえ、チームのパフォーマンスに悪影響を及ぼす、または怪我を招く恐れがあるため、その生起は防ぐことが望ましい。しかし躊躇や衝突を直接調べた研究はまだ少なく、特に仮説検証型の実験的研究は行われていないため、その現象は十分に解明されていない。本論文では、実験室で個人間協応運動課題を行わせ、先行研究において関係が示唆された習得と心理的プレッシャーにより躊躇と衝突の生起がどのように変化するか、またその変化は、どのような生起理由の変化により生じるのかを検討した。

本論文の第1章では、先行研究の知見をまとめた。第2章では失敗行動を質的に類型化し（目的1）、習得及び心理的プレッシャーが躊躇や衝突に及ぼす影響を調べた（目的2）。仮説は‘躊躇や衝突は習得において減少する（仮説1）’、‘躊躇や衝突はプレッシャー下において増加する（仮説2）’という2つであった。実験1では、右利きの女子大学生20名をランダムにペアにし、系列刺激による選択反応課題を行わせた。課題装置には、7つのボタンを横1列に並べた。実験参加者には、ターゲットとして7つのうちいずれか1つが点灯すること、押下による消灯と同時に次のターゲットが点灯すること、1試行につき7連続でターゲットが呈示されること、ペアとして協力して点灯するターゲットを押し終えることを教示した。習得50試行、コントロールテスト10試行、プレッシャーテスト10試行を行わせた。実験後、実験参加者の腕の動きに基づき失敗行動を類型化した結果、5種類の躊躇、1種類の衝突、4種類の複合（躊躇した後に衝突するなど、1ターゲットに2つの失敗を起こす行動）が確認された。しかし、習得とプレッシャーの影響は認められなかった。習得の試行数が少なく、実験参加者のスキル向上が十分になされなかったことが考えられた。

よって習得試行数を80試行とした実験2を行った。右利きの大学生80名をランダムにペアにして、同じ教示を用いて系列刺激の選択反応課題を行わせた。実験の結果、新たに1種類の複合が確認された。習得では躊躇と衝突の生起率が有意に低下し、習得による個人間協応の向上が示され、仮説1が支持された。先行研究との比較から、負荷されたプレッシャーは実際の競争場面に比べると低強度であったもののプレッシャーテストにおいてコントロールテストよりも躊躇と衝突の生起率が有意に増加した。これにより仮説2も支持され、プレッシャーが個人間協応を低下させることが明らかとなった。

第3章では、習得やプレッシャーが影響していない状況における躊躇と衝突の生起理由を調べた（目的3）。具体的には、ターゲットとの位置関係が失敗行動に及ぼす影響を量的手法により調べ、その他の生起理由を質的手法により調べた。20名の右利きの大学生をランダムにペアにし、1試行に1ターゲットを呈示する単刺激による選択反応課題を協力条件下で20試行行わせた。実験装置の中央部分には21のボタンをターゲット列として3列に設置し、各試行でいずれか1つをターゲットとして点灯させた。また実験参加者の手元には各5つのスタートボタンを設置し、1つずつを各試行前に点灯、押下させた。それによりターゲットとの位置関係を操作し、ターゲットから各実験参加者のスタート位置までが等距離か否か、ターゲットの呈示が両実験参加者を結ぶ直線上か否かを組み合わせた4つの呈示条件を

設けた。1条件5試行ずつランダムに行わせ、課題後には失敗した理由を尋ねる面接を行い、質的分析を行った。

しかし実験3では躊躇の生起回数が少なく、生起理由を十分に検討できなかったため、12名の右利きの大学生をランダムにペアにし、ターゲットから各スタート位置までが等距離か否か、ターゲットの呈示が中央列かそれ以外か、に呈示条件を変更した実験4を行った。両実験の結果、中央列にターゲットが呈示された時に躊躇が起きており、また質的分析では15の生起理由が抽出された。併せて推察すると、人が空間を認識する際に基準とする参照枠がペアの相手と不一致だった場合、または周囲の環境の中で高い顕著性を持つ参照枠を用いた際の参照枠同士の接点にターゲットが呈示された場合に失敗行動は生起し、特に躊躇が起きやすいと考えられた。その他の生起理由としては、性格、担当範囲の共有度の低さ、タイムを短くするための衝突受容意識などが挙げられた。さらにアクション・スリップまたは動作模倣と考えられる無意図的な失敗が示された。

この第3章の結果を基に、第4章では習得及び心理的プレッシャーが躊躇と衝突の生起理由に及ぼす影響を調べた（目的4)。実験5では、右利きの大学生28名をランダムにペアにして、第3章と同じ単刺激による選択反応課題を、習得80試行、コントロールテスト10試行、プレッシャーテスト10試行行わせた。課題中に、第3章の結果を基に作成した質問紙に回答させることで、習得及びプレッシャーの生起理由への影響を検討した。しかし実験5ではプレッシャーテストで躊躇が起きず、目的を十分に検討できなかった。衝突のパフォーマンスに対するリスクが小さかったことが原因と考えられたことから、衝突をしないようにとの教示を加えた実験6を、右利きの大学生14名をランダムにペアにして行わせた。

第5章では6つの実験結果から総合考察を行った。まず、習得を通して役割分担が進みペア内で参照枠が一致したことで、実験参加者はためらいなくターゲット対応を行うようになり、その結果個人間協応は向上し、躊躇や衝突が減少したと考えられた。実験2同様、プレッシャーの強度は比較的低かったものの、実験5では衝突が、実験6では躊躇と衝突が有意に増加し、習得において向上した個人間協応がプレッシャーにより低下した。その背景として、まずアクション・スリップまたは動作模倣として躊躇や衝突が増加した。躊躇増加については、衝突回避の意識の増加や慎重さの増加が関係していた。また衝突のパフォーマンスに対するリスクが比較的小さかった実験5では、良いパフォーマンスのためならば衝突をしても良いという衝突受容意識がプレッシャーによって増加した結果、衝突が増加した。一方で、衝突のパフォーマンスに対するリスクが比較的大きかった実験6では、躊躇や衝突を避けたいという意識がプレッシャーにより増加したことで、課題に必要な注意が不足したと考えられ、その結果、相手の動作を認識するタイミングが遅くなり、相手を避けられずに衝突していた。

本論文では、これまで検証されていなかった、躊躇や衝突といった個人間協応の失敗に影響する要因を明らかにした。また心理的プレッシャーが、先行研究で指摘されてきた個人内の行動面だけでなく、個人間の行動面にも影響を及ぼすことを明らかにした。今後も検討を進めることで、個人間協応の失敗に対する効果的な対処法や、チームスポーツにおける「あがり」のメカニズム解明に貢献できると考えられる。

評定競技の継続による認知機能の変化

實宝希祥（大阪体育大学）

学位：博士（スポーツ科学）、授与機関：大阪体育大学
取得日：2018年3月17日、指導教員：荒木雅信教授

はじめに

運動が心血管系や呼吸器系といった肉体的な変化をもたらすことは広く知られている。近年では、運動はヒトの知的機能である認知機能へも影響を与えることが示唆されており注目されている。本研究は、競技としての運動継続による認知機能の変化を明らかにしようとしたものである。

認知機能とは、知覚や注意、イメージなどのヒトが日常生活を送る上で必要とされる様々な知的機能を包括的に表したものである。これまでの運動と認知機能に関する研究では、主に運動介入が認知機能へ与える影響が検討されてきた。そのため、競技としての運動継続による認知機能の変化については不明な点が多い。さらにこれらの研究では有酸素性の運動課題を用いられることが多く、運動の種類が限られている。実験室研究ではあるものの、近年では手指の巧みさを必要とされる運動（例えばピアノやあやとり）と、中枢神経活動の関係性が報告されている。そこで、本研究では、これまでの研究で対象とされていない巧みな運動を必要とされる場面の多い評定競技を対象とすることで、運動が認知機能へ与える影響の知見を広めることとした。本研究では認知機能の中でも運動イメージ（motor imagery：以下MIと表記）に焦点を当てた。MIは、例えば記憶や予測といった他の認知機能に対しても大きな影響を及ぼす。競技においてもMIはイメージトレーニングなどにより、競技力向上へ寄与することが広く知られている認知機能である。MIは第三者から観察できないため、本研究では生理学的指標として脳波と事象関連電位（event related potential：以下ERPと表記）を、心理学的指標として各質問項目を用意したvisual analogue scale（以下VASと表記）と内省報告を用い多角的に検討を行った。脳波は周波数帯域毎に心理学的な意味付けが行われており、覚醒水準の評価にも適したものである。さらに脳波の一種であるERPは外的あるいは内的な事象に時間的に関連して生ずる電位変動である。そのため、ヒトの自発的な運動実行の準備過程などにおける、注意や期待といった心理的意味が反映されている。本研究ではこれらの指標を用い、評定競技の継続による認知機能の変化について、以下3つの実験から検討を行った。

実験的検討1

3年間の評定競技継続による認知機能の変化をシングルケーススタディ法により検討した。MIを課題に脳波とVASと内省報告及び競技成績(獲得技能)により、長期的な変化の概観を捉えることを目的とした。実験対象者は、大学入学期より新たに評定競技であるバトントワーリング競技を始め、3年間で全国大会出場までの競技力向上が認められた。運動技能の獲得については、バトントワーリングの技能を3種に大別しそれら全ての技能を徐々に獲得したことが確認された。MIの質である鮮明性（いかに色鮮やかにはっきりとイメージを想起できるか）と統御可能性（いかにイメージを自分の思った通りに操作できるか）の向上も確認された。脳波では、周波数帯域の変化からMI中の覚醒水準と注意処理資源の配分に変化が観察された。これらの結果から、競技力向上に伴い、覚醒水準の適切な状態での質の高いMIを想起できるようになることが明らかとなった（Zippo et al., 2017）。

実験的検討2

実験的検討1で、評定競技継続に伴う変化の概要が観察された。実験的検討2と3では、特に運動開始直前の局面である準備期に焦点を当てた。実験的検討2と3では、準備期と実行期の関係性をERPから検討した。ERPの中でも、運動と関連のある代表的な電位変動である随伴陰性変動（contingent

negative variation：以下CNVと表記）を指標として用いた。CNVは、2つの刺激間に陰性方向へ惹起される緩徐な電位変動であり、2つ目の刺激時に運動反応を要求することで、運動の準備期の心的過程を反映する。運動と関連のある電位変動で唯一外的な刺激をトリガとして用いるため、MI中の脳活動も検討できる指標である。また、CNVは時間的に2つの成分に分類することができ、運動反応直前の電位変動は後期CNVと呼ばれ、運動実行に対する注意や期待を反映する。しかしながら先行研究からは、この後期CNVと運動実行の成績（例えば反応時間など）との関係性は一貫した知見が得られていない。

実験的検討2では、後期CNVと反応時間の関係性を検討した。その結果、運動発現と関連のある領域と、注意機能をつかさどる領域において、反応時間との関係性が認められた。運動準備期における注意処理資源を、これから行うべき運動に対して動員することで迅速な反応が可能となり、それらが後期CNVにも反映されていることが明らかとなった。また、後期CNVが運動準備期を評価するに適した指標であることが確認された。

実験的検討3

評定競技のハイパフォーマンス選手の認知機能の特徴について検討を行った。対象としたハイパフォーマンス選手は世界大会上位入賞レベルであり、比較対象として地区大会から全国大会出場レベルの選手を中級者と設定した。課題はMIを用い、指標は実験的検討2において用いた後期CNVと、MIの質を検討するためにVASを用いた。その結果、ハイパフォーマンス選手と中級者では後期CNVに差は認められなかった。しかしながらMIの質はハイパフォーマンス選手の方が高かったことから、準備期における中枢神経活動を高めることなく、また、適切な注意処理資源の動員により、鮮明なMIを想起できる可能性が示唆された（實宝ほか、2016）。

まとめ

以上の結果より、評定競技の継続に伴う認知機能の変化が確認された。特に認知機能の基盤となりうる注意機能と、MIの質の変化及び、適切な覚醒水準での課題遂行が生理学的指標に反映され、認知機能の変化の一端を明らかにできたと考えられる。

今後の展望

本研究では、評定競技選手を対象にシングルケーススタディ法による初心者の縦断的測定やハイパフォーマンス選手の測定から貴重なデータを収集できたが、対象者数や対象とできた認知機能が十分であったとは言い難い。そのため、今後、多様な競技種目の検討、対象者数の確保により本研究の妥当性をさらに高めること、他の認知機能についての検討を行う必要がある。

付記

本論文作成にあたり、長年に渡って主指導教員としてご指導いただきました日本福祉大学の荒木雅信教授、副査をご担当いただきました大阪体育大学の岡村浩嗣教授、石川昌紀教授、ならびに親身に貴重なご指導をいただいた諸先生方に、この場をおかりして心から感謝申し上げます。

不確実な環境におけるタイミングの学習及び制御

杉山真人（神戸親和女子大学）

学位：博士（スポーツ科学）、授与機関：大阪体育大学
取得日：2018年3月17日、指導教員：荒木雅信教授

1. 研究の背景と目的

日常生活からスポーツ活動に至るまであらゆる運動行動には系列的な性質が存在する。一般的に系列的性質を伴う運動技能は野球のバッティングやバレーボールのレシーブなどのように環境からの刺激に応じてタイミングを発揮しなければならない。このタイミングの発揮には見越しや予測、あるいは予期といった能力に代表されるように、環境と運動実行者の将来の状態に関する情報を先取りする行為が含まれる。また、上述のスポーツ活動はある程度運動パターンが予測できることから、運動実行者は環境からの情報を利用した運動を行っていることが多くの先行研究から裏づけられている。他方で環境情報の不確実性の程度（ランダムネスの程度）という観点からタイミングの学習や制御ににについて検討した研究は十分ではなく、不確定度や冗長度などと反応の見越しを伴う運動行動の関係についてはいまだ不明な点が多い。そこで本研究は、環境の不確実性がタイミングの学習及び制御に与える影響を明らかにすることを目的とした。まず、第1章ではこの研究目的を達成するために、上述したタイミングを含めた当該研究領域の先行研究を整理し、問題の所在を明確にした。その上で、本研究目的を達成するために各章で行う実験課題の構築を行った。

2. ランダム刺激に対する反応の一様性

第2章では、一様乱数を用いたランダム呈示を一様ランダム刺激とし、この刺激に対する被験者の反応の特徴を見出すことを試みた。実験装置は被験者前方に設置された刺激呈示ボックスと手元の反応キーで構成された。被験者は光刺激の呈示位置に対応した系列位置に反応することを求められた。その際、できるだけ刺激の点灯と被験者の反応を一致させることを求められた。その結果、一様な反応分布を示すという特徴を得た。この結果は、一様な刺激と反応の性質が、パターンのある系列課題のタイミングの学習に与える影響を見出す上での基礎的な知見と位置づけられる。

3. 一様ランダム呈示の習得パフォーマンスへの影響

第3章では第2章での実験を踏まえ、複数の系列パターンの学習を行う際、呈示順序の違いが系列パターンのタイミングの習得過程に与える影響を明らかにすることを目的とした。3種類の系列パターンを一様ランダムな呈示順序で行う一様ランダム条件を設けたのが特徴である。具体的には、A、B、Cの系列パターンがあり、それぞれを習得しなければならない時、A、B、Cの呈示順序を一様乱数に基づいたランダム呈示をした。これに加え、3種類のうちの一つのパターンを繰り返し練習してから次の系列パターンを練習するブロック条件、A、B、Cという3つの系列パターンをABCABCABC…というように、一つのパターンを行ったら次のパターンへ移行しそれが繰り返されるスケジュールで行うシリアル条件を設け、系列パターンのタイミングの習得の程度を比較した。その結果、一様ランダム呈示を用いた練習スケジュールにおいては系列パターンを用いたタイミングの向上は見出されなかった。

4. ランダム呈示による課題習得レベルと学習効果

第3章の実験では系列パターンの習得過程に焦点を当てたため、呈示順序の違いが比較的永続的な学習に与える影響については十分に評価できていない。そこで第4章では、習得段階終了後、保持課題と転移課題を行わせ学習の評価を試みた。呈示条件は一様ランダム条件とブロック条件を設けた。呈示条件の特徴は前章と同様であった。その結果、習得段階だけではなく、保持段階及び転移段階においてもブロック条件の方がランダム条件よりも優れたタイミングの反応を示した。運動学習領域では、複数

の課題をブロック化して練習するブロック練習よりも、毎回異なる順序で課題を練習するランダム練習の方が、学習が促進されるという文脈干渉効果に代表されるように、呈示順序のランダムネスの有効性を支持する研究がある。他方で、本章の結果から系列パターンのタイミングの学習は一様ランダム呈示の無秩序さに強い影響を受けることが明らかとなった。

5. 過剰学習による系列要素の組織化

第2章から第4章までの実験では、呈示される刺激に反応する強制ペースのS-R事態を想定した課題における不確実性を対象とした。他方で、実際の環境下での運動行動は推測によって解を導き、反応を行うとともに、その反応を連続的に実行することによって環境に内在するパターンを学習する事態も存在する。このような事態での学習は環境に内在する情報が重要な要因となると考えられる。そこで第5章では、推測による反応が求められる課題を行わせ、情報量と系列パターンの形成過程について検討した。具体的には系列パターンを過剰学習させた際の冗長性と系列依存性が系列パターンの学習過程における正確で高速な反応の出現に与える影響を明らかにすることを目的とした。被験者は予めパターンが知らされていない状況下で推測による反応を行った。この時、誤反応であれば正しい反応位置の正面の刺激呈示ボックスから光刺激が点灯し、正反応であれば消灯したままであった。すなわち、被験者自身の推測反応と正面の刺激ボックスからのフィードバック情報を頼りにパターンを習得することが求められた。そして、できるだけ速く正確に反応しなければならなかった。結果として課題の遂行に伴い、既知となった系列の数に依存して、不確定度が減少するとともに冗長度が増大した。また、課題の遂行に伴って系列要素の組織化が認められた。

6. 捕捉行為におけるタイミング特性

一連の研究ではタッピング課題を用いてきたが、第6章ではこの環境を拡張し、歩行及び捕捉が求められる課題を用いてターゲットの速度変化が捕捉行為の方略に与える影響及び頭部の変位の特徴を明らかにすることを目的とした。被験者はスタート地点から捕捉地点に移動するとともにターゲットの到達と自身の移動完了を一致させることを求められた。ターゲットが等速で移動する課題のみを遂行する条件と不規則変化するパターン及び等速課題をランダムに呈示した条件を比較した。ターゲットと被験者の協調関係と頭部の変位パターンの結果から、ターゲットが不確実に変化する状況下では予期的な制御を伴った捕捉行為が行われる可能性が見出された。

7. 総合考察

以上から、不確実な状況でのタイミングの学習は困難であることと、予期的な制御が行われる可能性が示唆された。不確実な環境は運動実行者の円滑な運動の妨げとなる重大な問題である。本研究を通してこのような事態でのタイミングの学習及び制御を特徴づけることができた点は重要である。特に環境に対する見越しや予期という身体運動の重要な機能の理解に貢献できる可能性を示唆した点は、知覚運動学習及び制御の側面から身体システムの理解を深める上で意義がある。

大学生アスリートにおける反すう特性・省察特性がメンタルヘルスに与える影響とそのメカニズム
－状態自尊感情に着目して－

山越章平（聖泉大学）
学位：博士（スポーツ科学）、授与機関：大阪体育大学
取得日：2018年3月17日、指導教員：土屋裕睦

近年、非アスリートを対象にした研究ではあるが、Trapnell and Campbell（1999）が提唱した反すう特性・省察特性が注目されている。反すう特性は、自己への脅威、喪失、不正によって自己に注意を向けやすい特性と定義されており、省察特性は、自己に対する好奇心や興味によって自己へ注意を向けやすい特性と定義されている。博士論文では、大学生アスリートを対象に、反すう特性・省察特性がメンタルヘルスに与える影響とそのメカニズムについて、自己評価の指標である状態自尊感情に着目して量的・質的研究法を用いて検討することを目的とした。博士論文では、3つの研究を行った。

研究1では、反すう特性・省察特性はストレス反応、および主観的幸福感に異なる影響を与えるというモデルについて、構造方程式モデリングを用いて検討した。反すう特性はストレス反応に正の影響を、主観的幸福感に負の影響を与え、一方の省察特性はストレス反応に負の影響を、主観的幸福感に正の影響を与えていたことが明らかにされた。これらのことから、本研究で設定した仮説モデルは支持された。

研究2では、反すう特性・省察特性がストレス反応、および主観的幸福感に与える影響は、状態自尊感情が媒介するというモデルについて、構造方程式モデリングを用いて検討した。反すう特性は状態自尊感情に負の影響を与え、状態自尊感情はストレス反応に負の影響を、主観的幸福感に正の影響を与えていたことが示された。また反すう特性は直接的にストレス反応に正の影響を、主観的幸福感に負の影響を与えていた。一方の省察特性は、状態自尊感情に正の影響を与えていたことから、間接的にストレス反応に負の影響を、主観的幸福感に正の影響を与えていた。また省察特性は、ストレス反応に負の影響を、主観的幸福感に正の影響を与えていた。これらのことから、本研究で設定したモデルは支持された。

研究3では、「反すう特性が高い大学生アスリートの状態自尊感情は、どのようにして低下するのか」、「省察特性が高い大学生アスリートの状態自尊感情は、どのようにして向上するのか」という2つのリサーチクエスチョンに対して、質的研究法を用いて検討した。1つ目のリサーチクエスチョンに対しては、「反すう特性が高い大学生アスリートは、[Ca1 他者と比べて自身が劣っていることに注目する] ことから、[Ca2 他者との競争・敵対関係] を構築してしまい、その結果 [Ca3 居場所の喪失] を感じることで、最終的に状態自尊感情が低下する」という仮説が生成された。2つ目のリサーチクエスチョンに対しては、「省察特性が高い大学生アスリートは、[Ca1 他者との関わりから自己を捉え直す] ことから、[Ca2 他者との協力・友好関係] を構築することができ、その結果 [Ca3 居場所の発見・追求] に至り、最終的に状態自尊感情が向上する」という仮説が生成された。以上から、反すう特性・省察特性によって、自己（他者と比べて自身が劣っていることに注目する / 他者との関わりから自己を捉え直す）・他者（他者との競争・敵対関係 / 他者との協力・友好関係）・集団（居場所の喪失 / 居場所の発見・追求）に対する捉え方が違うことから、状態自尊感情のレベルも異なることが示唆された。

以上から、反すう特性・省察特性が大学生アスリートのメンタルヘルスに異なる影響を与えており、そこには自己・他者・集団に対する捉え方、状態自尊感情が媒介していることが示唆される。本研究の結果から、大学生アスリートにおけるメンタルヘルス低下の予防および効果的な介入方法として以下の点が提言できる。1つ目として、反すう特性が高いアスリート、または省察特性が低いアスリートはメンタルヘルスに関する問題を抱えやすいことから、大学生アスリートの反すう特性・省察特性を測定す

ることで、メンタルヘルスに関する問題の早期発見につながるだろう。2つ目として、Trapnell and Campbell（1999）が提唱した反すう特性と省察特性は比較的安定したものであるため、変容させることは困難であることから、反すう特性が高い、または省察特性が低い大学生アスリートに対して、状態自尊感情の変容に焦点化した介入を行うことにより、効果的にメンタルヘルスを向上させる可能性があるだろう。3つ目として、反すう特性が高いアスリート、または省察特性が低いアスリートの状態自尊感情を高めるには、自己・他者・集団に対する捉え方を変容させることが効果的であり、その結果メンタルヘルスの低下につながることが示唆された。

マイクロサッカードを指標とした潜在的注意に関する研究
ーテニスのサービスに対する予測反応課題を用いてー

髙橋正則（日本大学）
学位：博士（学術）、授与機関：九州工業大学
取得日：2018年3月23日、指導教員：磯貝浩久准教授

テニス競技では、近年、予測しにくいクイックサービスの技術が発展するとともに、より高速化が進行していることから、レシーブのスキルを向上するためには、早く正確な予測スキルの獲得が求められる。本研究は、ある特定の位置を注視しながら周辺視システムを用いてより多くの情報を収集すると考えられているビジュアル・ピボットという認知方略に着目し、テニスのサービスに対する予測反応課題を用いて、固視微動であるマイクロサッカードを指標とした潜在的注意による視覚的手掛かりの重要性を明らかにすることを目的とした。具体的には、予測反応に影響を与えると考えられる文脈的手掛かりと視覚的手掛かりとの関係を踏まえた上で、テニスのシングルスとダブルスにおける予測時の視覚探索方略を検討した。

本論文は、全5章から構成され、第1章では、スポーツにおける予測研究を概観し、特にテニスの競技特性を踏まえ、競技場面における予測の重要性と、視覚的手掛かりおよび文脈的手掛かりの有効性を指摘した。さらに、視覚的手掛かりを得るための視覚探索方略を検討することの意義として、顕在的注意に加え、潜在的注意による視覚的手掛かりを推定する必要性を述べた。そして、固視微動のマイクロサッカードに着眼点を当て、これまでの先行研究をまとめた。

第2章では、テニスのシングルスにおけるサービスに対する予測反応課題を設け、確率情報という文脈的手掛かりが被験者（熟練者および非熟練者）の予測反応に与える影響を実験的に検討し、予測時の文脈的手掛かりと視覚的手掛かりの関係を捉えた。その結果、熟練者では反応時間や予測正確率、推定予測時期に文脈的手掛かりの影響は直接的に示されず、むしろ、有用な視覚的手掛かりを活用した高い予測スキルを示した。一方、非熟練者では熟練者のように推定予測時期がボール・インパクト以前となることはなく、反応の早さよりも正確性を重視した予測反応を示したが、文脈的手掛かりは反応時間や推定予測時期を有意に早める影響を及ぼしたことから、文脈的手掛かりは認知的構えを高め、結果として運動時間を短縮する可能性を示唆した。したがって、テニス選手が時間的制約下で対戦相手のサービスを早く正確にコース予測するためには、文脈的手掛かりにより認知的構えを高め、文脈的手掛かりにより高められた期待をも修正可能な、サービス動作の視覚的手掛かりに基づく効率的な予測スキルが重要であることが明らかとなった。

第3章では、テニスのシングルスにおけるサービスに対する予測反応課題において、ビデオ映像を自由に視覚探索するフリー条件とビデオ映像中に挿入したターゲットを注視するインパクト注視条件およびリリース注視条件の3条件を設定し、熟練者の眼球運動から固視微動であるマイクロサッカードの検出を試みた。その結果、実際の競技場面で見られるように、教示に基づく高い正確性を重視した反応を示し、フリー条件ではリリース注視条件よりも有意に早く正確であった。しかし、フリー条件とインパクト注視条件では有意差が認められなかったことから、インパクト地点付近における視覚的手掛かりの重要性が指摘された。また、各課題中の眼球運動データから、Engbert and Kleigl (2003) の方法に基づいてマイクロサッカードの検出を試みた結果、フリー条件ではほとんど検出されなかったが、2つの注視条件で数多く検出され、算出された各パラメータはMartinez-Conde et al. (2004) が示した特徴量の範囲内であったことから、マイクロサッカードとしての正当性を確認した。このことは予測反応事態を想定した動画に注視すべきターゲットを設定することでマイクロサッカードを検出することが可

能であることを示唆した。さらに、それらの出現頻度と方向を詳細に検討すると、予測時の注視様式や潜在的注意の対象を推定できることから、潜在的注意による視覚的手掛かりの指標として有効であることが明らかとなり、マイクロサッカードが潜在的注意を示しているとする先行研究を支持した。また、テニスのシングルスにおけるサービスに対する予測反応事態では、熟練者はビジュアル・ピボットという認知方略による視覚探索方略を有効に機能させ、予測に関わる重要な視覚的手掛かりを潜在的注意によって獲得し、高度な予測スキルを発揮していることが示唆された。

第4章では、テニスのダブルスにおける前衛情報を伴うサービスに対する予測反応課題を用いて、第3章と同様の3条件による熟練者の眼球運動からマイクロサッカードを検出し、それらの出現頻度と振幅、方向から潜在的注意が示す視覚的手掛かりの具体的内容を検討した。その結果、フリー条件とインパクト注視条件では教示に基づく高い正確性を重視した反応を示した。また第3章と同様に、マイクロサッカードは2つの注視条件において検出され、算出された各パラメータからそれらの正当性を確認した。さらに、ダブルスの場合もシングルスと同様にビジュアル・ピボットをインパクト付近に置くインパクト注視条件の方がリリース注視条件よりも高いパフォーマンスを発揮することが可能と考えられ、各注視条件におけるマイクロサッカードの各パラメータから潜在的注意の内容を推定した。特に出現頻度と振幅、方向から、熟練者の視覚的注意はサービス動作に対してだけでなく、実際には相手の前衛を注視していなくても潜在的に注意を向けることが可能であったことが示され、シングルスとダブルスにおけるレシーバーの視覚探索方略の違いを見出した。したがって、テニス熟練者は相手のサービス動作だけでなく前衛の情報に対しても潜在的注意を配しながら予測のための視覚的手掛かりを得ようとするビジュアル・ピボットという認知方略に基づいた効率的な視覚探索方略を利用できることが示唆された。

第5章では総括として総合考察と結論をまとめ、本研究からの示唆と今後の展望を述べた。以上のことから、テニス熟練者が時間的制約下で対戦相手のサービスを早く正確にコース予測するためには、文脈的手掛かりにより認知的構えを高めるとともに、文脈的手掛かりにより高められた期待をも修正可能な、サービス動作に関する視覚的手掛かりが重要であることが明らかとなった。また、予測反応事態の実験環境に注視条件を設定することでマイクロサッカードを検出することが可能となり、マイクロサッカードが潜在的注意による視覚的手掛かりを示す指標として有効であることが実証された。そして、熟練者のサービスに対するコース予測時の視覚探索方略は、実際に注視点が空間的な対象を捉えていない場合でも、例えばボールと身体との間に生じるインパクト地点に注視点を配置するようにビジュアル・ピボットという認知方略を用い、シングルスでは周辺視野のラケットや腕の動きを、ダブルスでは前衛情報に潜在的注意を向け、ボールと身体との相対的な空間的位置関係を把握してコース予測に至ることができると結論づけられた。このように、本研究ではマイクロサッカードを潜在的注意による視覚的手掛かりを示す指標とすることで、予測反応事態における視覚的手掛かりの重要性を明らかにしたと判断される。

Ⅴ．海外情報

海外情報

福原和伸（首都大学東京）

平成29年10月から平成30年2月までの5ヶ月間、所属機関のサバティカル制度を利用し、オランダにあるアムステルダム自由大学（Vrije Universiteit Amsterdam：通称VU（フー））の客員研究員として短期留学する機会を頂いた。中本浩揮先生（鹿屋体育大学）と同じ研究室を選んだこともあり、昨年度と話題が重なるが、今後留学を控えている（または検討している）若手に向けて私の経験を報告したい。なお本号の「研究室紹介」もあわせてご拝読頂ければ幸いである。

アムステルダムはヨーロッパの小都市であり、冬の天候は日本で想像したより極寒ではなかった（今年は日本の方が寒い）。ただインフラやサービス業が日本より遅れているため、そのギャップには苦労した（日本は本当に便利である）。しかし、他民族国家であることや治安が良いことは、家族（妻と息子）を連れて留学した私にとって安心して生活できる環境であった。院生時代から待ち憧れた留学生活はすべてが刺激的であり、研究のエキスパートと同じ空間で一緒に仕事をできることが、とにかく嬉しく、楽しかった。

VUには、Human Movement Scienceを対象とする著名な研究者が数多く在籍する（図1）。所属先のFaculty of Behavioural and Movement Sciencesは、運動学習や運動制御、スポーツバイオメカニクス、運動生理学など、すべての研究が「ヒトの身体運動」である。専門の垣根を越えて日々議論や技術提供をする場があり、アイディアが生まれてから形（論文）にするまでのスピードは日本よりも速い。研究ミーティングは英語で行われ、世界各国から毎週のようにゲストスピーカーを向かえ議論する。院生がこうした教育を当たり前のように受けている姿を見ると、大御所と堂々と議論できるポテンシャルには納得がいく（オランダには上下関係の文化がないことも理由の一つ）。一般に、留学先の選定は受入研究者に目がいきがちだが、私は他分野から意見をもらうことや、その仕事振りを間近で見ることを優先したかった。こうした経験は、凝り固まった考えを変えるきっかけとなるからだ。VUを留学先とした理由がここにある。

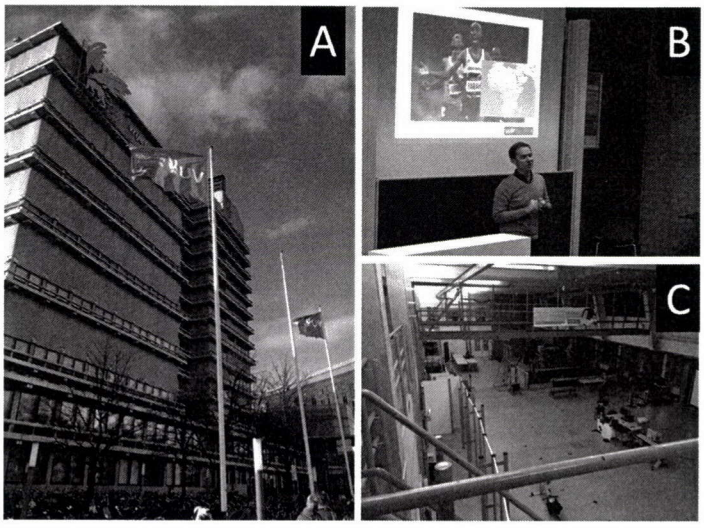


図1．アムステルダム自由大学。
A：大学の正門前からの様子。B：講義中のMann氏。熟達化やタレント発掘に関する授業を1ヶ月集中して行う。C：体育館ほどの広さの実験室。様々な実験機材が設置されている。

もう1つの選定理由は、受入研究者であるDavid Mann先生と一緒に研究することであった。Mann氏はオーストラリア出身の「視覚」を専門とした若手研究者であり、打撃時のインターセプト課題を対象とした熟練競技者の眼球運動と予測的行動の研究に携わっている。その仕事振りは「世界を飛び回る商社マン」のようである。新しいアイディアが思いつけば、他国の研究者に遠慮なく情報提供や技術提供を交渉し、それが面白いように実現していく。他にも、スポーツ科学で留まる話題について、ヒトの身体機能の限界を探る基礎研究として伝える技（プレゼンや文書）も優れていた。これはスポーツに全く興味のない人たちに対し、自身の研究の面白さをアピールする上で重要な技である。Mann氏は、現場（コーチや選手）が何を求めているのかを敏感に察知し、どうすれば世間に受け入れられるのかを並列的に考えていた。これは理論（フレームワーク）を十分に理解した上で、現場への貢献を常に意識している証拠である。こうしたワークスタイルは（私の能力で実現できるかは別として）、日本で仕事を進める上で良い参考となった。

滞在時の研究活動は、Mann氏や中本氏とともに（あいにく、中本氏とは留学時期は重ならなかった）、ヴァーチャルリアリティ（VR）環境を利用したテニス選手の予測的運動行動に関する研究を進めた。最近、VRは身体運動科学の一つの実験系として確立され始めており、VUのフロアではヘッドマウントディスプレイを使う様々な実験に着手していた。私が井田博史先生（上武大学）と伴にVR研究を始めたのは15年前、当時は「何の役に立つのだ？」と批判を受けたが、その時代は大きく変わりつつある。ただし、目の付け所というか、研究の基礎がしっかりしているとこうも違うものかと、批判を受けた理由が分かる事件があった。それはMann氏と中本氏が「頭部と視線の関係性」を測るだけで、熟練打者の知覚と運動との特徴を評価できてしまったのだ。彼らがVRを手にすると発想がここまで斬新なものになるのかと、愕然したことを覚えている。

留学をして一番困ったことは、やはり言葉であった。多くの教員や院生は、オランダ語だけでなく英語も堪能である。にもかかわらず、私は英語で細かいニュアンスを伝えることができず（これだけが理由ではないが）、国際色豊かな文化の違いに戸惑うこともあり、どうやってコミュニケーションをとればよいか躊躇する日々が続いた。「留学をすれば、目前のすべてが変わり、仲間と楽しい時間を過ごす」といった理想卿はそこにはなかった。皆、様々なプロジェクトを抱えて忙しいわけで、英語を話せない（話そうとしない）日本人に付き合うほど暇ではない。こちらから話しかけなければ、1日会話なく終わることも多くある。やはり、留学前には英語を一生懸命に取り組むべきである。

しかし幸運なことに、この状況を助けてくれたのが（周囲が気を使った）、私の専門技術であった。私はアバター（VRのヒトモデル）を構築する技術を持っている。例えば、テニスや野球選手のアバター構築には、モーションキャプチャデータをアバターに転送する技術が必要となる。当時、フロアの半数以上がアバター作りに苦戦しており、私の専門技術は格好のターゲットであった。彼らの目的はあくまでも研究を進めることなので、それを実現するためのコミュニケーションは積極的である。自身にこうした強みがあることに気付いたのは、留学してから間もなくである。VUには体育館ほどの大きな実験室や、テクニシャンも多くいるが、日本のように高額な機械を贅沢に使える環境はない。研究のアイディアがすべてであり、これで勝負できなければ特殊な技術で勝負するしかない。他者の研究に貢献できるツールを1つでも多く持つことは、言葉（文化）の違う研究者間の理解を深める上で重要であると痛感させられた。

VUでは17時を過ぎると、殆どのスタッフはフロアにいない。当初、勤務外は家族と過ごすことを優先すると思っていた。しかし、Mann氏から夜中にメールが戻ってくるところを見ると、家事や子育てが終わった後、研究や事務仕事に従事していたようである。Mann氏の業績を生む秘訣（能力が高いだけではない）を知ることができて安心した一方、今

まで家事をさぼっていた振る舞いを猛烈に反省したし、妻の支えによって研究ができている事実を再確認させられた。こうしたエピソードから分かるように、Mann 氏と中本氏は同世代であり、置かれている境遇が似ている。研究以外にも、家族と一緒に交流するなど共通の話題を持つことが出来るのだ。中でも、私にとって最も幸運なことは、大御所の先生とは異なり、これから数十年もの長い年月をかけて研究仲間として付き合える点にある。私の留学は5ヶ月の短期間であったため、これからが勝負であり、オランダとの繋がりが途切れないよう努力していきたい。私たちの経験や繋がりが体育心理の研究者の糧となるよう（わずかであるが）、何かしらの形で貢献できればと思っている。

Ⅵ. 日本体育学会第69回大会関連

日本体育学会第69回大会案内

Ⅰ．プレセミナー（企画委員会）

下記の要領で、体育心理学専門領域プレセミナーを開催いたします。皆様、お誘い合わせのうえ、奮ってご参加いただければと存じます。

・日程：平成30年8月23日（木） 14:00～17:00（情報交換会は19:30まで）
・集合場所：阿波おどり会館前 14:00集合
・会場：阿波おどり会館
〒770-0904 徳島県徳島市新町橋2丁目20番地 TEL. 088-611-1611
http://www.awaodori-kaikan.jp/
・テーマ：阿波おどり「踊る阿呆に見る阿呆」の心から研究デザインを探る
・講師：中村久子先生（徳島大学名誉教授）
・募集定員：50名（先着順）
・申込締切：8月10日（金）
・参加費：入場料300円・昼の講演800円（団体割引あり）
※学生は入場・講演に関する費用は無料（体育心理学専門領域からの参加助成が適用されます）
情報交換会参加者はプラス4,000円（予定）
・申込方法：同封してある別紙資料を参照してください。

Ⅱ．学会大会（学会大会委員会）

・日程：平成30年8月24日（金）～26日（日）
・会場：(8/24～8/25) 徳島大学常三島キャンパス，(8/26) あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）
・学会大会スケジュール（体育心理学専門領域）：

8/24 10:30-11:30 キーノートレクチャー1
12:00-13:00 理事会
13:30-14:50 口頭発表1・2
15:30-17:00 ポスター発表
8/25 9:00-11:00 シンポジウム
11:00-12:00 総会
12:00-13:00 ランチョンセミナー
13:10-14:10 キーノートレクチャー2
14:20-15:00 口頭発表3・4

＜シンポジウム＞

テーマ：「ともにあるき、ともにわらう：協調と共感のダイナミクス」
(Walking together, laughing together: coordination, sympathy, and interpersonal dynamics)

司会：工藤和俊（東京大学）

演者：横山慶子（名古屋大学）

「集団スポーツにおける協調と共感」

(Coordination and sympathy in collective sports)

演者：服部裕子（京都大学霊長類研究所）

「協調と共感の起源：ヒトとチンパンジーにおけるリズム同調の比較」

(Evolutionary origins of coordination, sympathy and interpersonal dynamics: A comparative study in chimpanzees and humans)

演者：Michael J. Richardson & Rachel W. Kallen (Department of Psychology, Macquarie University, Australia)

「Embedded Dynamics of Social-Motor Coordination」

(社会 - 運動協調に埋め込まれたダイナミクス)

指定討論者：木島章文（山梨大学）

＜キーノートレクチャー１＞

演者：藤田勉（鹿児島大学）

演題：スポーツ動機づけ研究の展開と展望

(Advances and prospects in sport motivation research)

司会：　佐々木万丈（日本女子体育大学）

＜キーノートレクチャー２＞

演者：幾留沙智（鹿屋体育大学）

演題：アスリートの熟達化を支える自己調整学習のすすめ

(Promoting self-regulated learning for the development of sport expertise in athletes)

司会：中本浩揮（鹿屋体育大学）

Ⅶ. 事務局報告

平成29年度体育心理学専門領域　第1回理事会　議事録

記録者：國部雅大

日時：平成29年4月2日（日）10:30～12:20
場所：名古屋大学　ES総合館1F　ES会議室

出席者：阿江美恵子（会長）、工藤和俊（理事長）
佐々木万丈、山本裕二、菅生貴之（学会大会委員）
北村勝朗、東山明子（企画委員）
兄井　彰、荒井弘和、荒木香織（広報委員）
國部雅大、奥村基生（庶務・会計委員）
木島章文、田中美吏（監事）
欠席者：磯貝浩久（企画委員）（理事：委任状）

挨拶（阿江会長）

＜報告事項＞

1．平成28・29年度新旧理事会議事録確認、総会議事録確認（事務局）
前回行われた新旧理事会および総会の議事録が確認された。

2．平成29・30年度体育心理学専門領域役員（事務局）
工藤理事長より、平成29・30年度体育心理学専門領域の理事役員について報告され、理事の役割分担が確認された。

3．会員の異動（庶務・会計委員会）
奥村理事より、昨年度669名から668名へと1名減少していることが報告された。

4．会報第29号（通巻57号）発刊の準備状況（広報委員会、庶務・会計委員会）
兄井理事より、会報29号の原稿依頼状況が報告された。研究室紹介、学位論文紹介、海外情報については、今後原稿執筆適任者を探し依頼することが報告された。巻頭言は阿江会長、編集後記は兄井理事が今後執筆する。6月末を原稿回収期限とする予定である。
國部理事より、第67回大会（大阪体育大学）関連の29名分の原稿については、1名の未提出者以外は回収済みであると報告された。会報は、7月末に発刊および送付を予定している。

5．体育学研究・IJSHS編集委員の推薦（事務局）
工藤理事長より、学会誌編集委員および学会賞選考委員の推薦に関して、以下の報告がなされた。
体育学研究編集委員として、石倉忠夫先生、上野耕平先生、高見和至先生、田中ゆふ先生、福原和伸先生、正木宏明先生、蓑内豊先生を推薦した。
IJSHS編集委員として、清水安夫先生、平田智秋先生、村山孝之先生、山口幸生先生を推薦した。
学会賞選考委員として、杉山佳生先生を推薦した。

6．日本体育学会若手研究者特別委員会委員の推薦（事務局）
工藤理事長より、若手研究者特別委員会候補者として國部雅大先生、横山慶子先生を推薦し、國部雅大先生が委員として選出された。國部理事より、委員会の活動内容に関する報告があった。

＜審議事項＞

1．平成 28 年度決算案（事務局）

奥村理事より、平成 28 年度決算案が提示され，会計処理が適正であることが木島監事より報告された。この際、平成 28 年度の決算報告における予算額と平成 29 年度予算案の前年度予算額の値が一部異なっているという指摘があり、理事会後に前会計担当に確認したところ、決算報告における予算額に誤りがあったということが判明した（決算額について誤りはなかった）。したがって、理事会後に理事長が以下の 2 点で対応することとした。今後平成 28 年度決算報告の正本に監査の署名・捺印を依頼し、会報の印刷までに間に合わせること。また、第 2 回理事会において、訂正した平成 28 年度決算報告を改めて報告すること。

2．平成 29・30 年度事業案（事務局）

工藤理事長より、平成 29 年度事業案が提示された。従来通りの事業を継続することが提案され承認された。内容は 1. 日本体育学会第 68 回大会の体育心理学専門領域の企画・運営、2. 日本体育学会第 68 回大会時のプレ / ポストセミナーの企画･運営､3. 体育心理学専門領域会報第 29 号の発行､4. 理事会（4 月、8 月）、5. 総会（8 月）であった。また、年度会費の値上げに伴う収入増（約 30 万円）の分で行う事業案に関し、当初は外国人招聘を計画していたが、今期は役員改選があり、また第 68 回大会の企画提案の期限が 3 月末と早かったことから、本年度の学会期間において企画招聘するのは実質的に困難であるため、代替事業案について議論が行われた。その結果、本年度はホームページの充実を行うことが提案され承認された。

また、来年度以降のシンポジウム等での外国人招聘企画実施を見据え、海外の研究者との交流に関する具体的な内容について、各委員長の理事を中心に検討して頂くことを確認した。

工藤理事長より、平成 30 年度の事業案が提案された。新旧理事会および役員選挙を含む従来通りの事業を継続することが提案され承認された。

3．平成 29 年度予算案・補正予算案（事務局）

奥村理事より、平成 29 年度予算案・補正予算案が提案された。補正予算案として、外国人招聘の 30 万円を広報費（HP の管理･充実のための費用）に移すことが提案され承認された。補正予算案については、今後総会での承認を受けることとなる。

4．第 68 回大会のキーノート、シンポジウム（学会大会委員会）

佐々木理事より、第 68 回大会のキーノート、シンポジウムに関する内容及び演者について提案され承認された。シンポジウムについては「アスリート・ファーストがもたらした光と影」をテーマとし、演者への打診を行ったことが報告された。キーノートについては、2 名の演者に依頼することが了承された。5 月中旬の抄録提出期限に間に合うよう、今後企画の詳細を確定していくことが確認された。なお、審議の過程で理事会決定前に演者に依頼がなされたことがわかり、今後は理事会決定後に正式依頼をすること確認した。

5．第 68 回大会の専門領域プレ／ポストセミナー（企画委員会）

北村理事より、第 68 回大会の前日に行われる専門領域プレセミナーについて提案された。内容は「メンタルトレーニング実践演習 in 静岡大谷ゴルフ場」であり、企画名やその説明について若干の修正を加えた上で了承された。開催時間、講師及び参加者数などの詳細については今後検討することが確認された。

6．会則の改正について

工藤理事長より、会則の改正に関し、役員の任期と事務局所在地の2点について提案があった。

役員の任期（第7条）に関して、事務局担当理事および会長の重任を妨げないための会則の改正が提案され審議された。改正する条文の詳細については、工藤理事長が関矢前理事長に確認しながら原案を作成し、メール審議を行うことが確認された。改正内容に関する最終的な承認は、総会において得る予定であることが確認された。

事務局所在地に関して、会計口座の移管手続きに必要であるため、会則の条文中に事務局所在地を記載することが提案された。具体的な記載箇所についてもあわせてメール審議を行うことが確認された。ただし、会計業務が滞らないよう、移管手続きに必要となる箇所については、速やかに変更した上で手続きを行うことが了承された。

7．役員の追加

工藤理事長より、平成29・30年度の幹事として鈴木啓央先生（龍谷大学）に就任を依頼することが提案され承認された。

8．第68回大会のランチョンセミナー

工藤理事長より、第68回大会のランチョンセミナー開催に関する提案があった。開催の有無、内容および日程（9月9日または10日）に関しては、学会大会委員会と企画委員会とで今後検討を行うことが確認された。

平成29年度体育心理学専門領域　第2回理事会　議事録

記録者：國部雅大

日時：平成29年9月9日（土）12:00～12:55
場所：静岡大学　A号館　102教室

出席者：阿江美恵子（会長）、工藤和俊（理事長）
佐々木万丈、菅生貴之、山本裕二（学会大会委員）
北村勝朗、磯貝浩久、東山明子（企画委員）
兄井　彰、荒井弘和（広報委員）
國部雅大、奥村基生（庶務・会計委員）
木島章文、田中美吏（監事）
鈴木啓央（幹事）
欠席者：荒木香織（広報委員）（理事：委任状）

挨拶（阿江会長）

＜報告事項＞

1．前回理事会（平成29年度第1回理事会）議事録確認（事務局）
前回行われた理事会の議事録が確認された。

2．会員の異動、会費納入状況、平成29年度会計中間報告（庶務・会計委員会）
國部理事より、昨年度末時点の会員数668名から、本年度7月25日時点の会員数676名へと8名増加していることが報告された。奥村理事より、本年度7月時点で559名が本年度会費納入済みであることが報告された。工藤理事長より、体育心理学専門領域へ147,000円の補助金が振り込まれたことが報告された。

3．会報29号（通巻57号）について（広報委員会、庶務・会計委員会）
國部理事より、会報29号が7月末に発刊され、8月上旬に発送されたことが報告された。

4．第68回大会について（学会大会委員会）
工藤理事長より、今大会においてシンポジウムおよびキーノート2題、口頭発表13題およびポスター発表97題が予定されているとの報告があった。

5．第69回大会について（学会大会委員会）
次年度、徳島大学において8月24日～26日の日程で第69回大会が開催されることが報告された。なお、第70回大会は慶応義塾大学で開催される予定であることが報告された。

6．日本体育学会政策検討・諮問委員会および若手研究者特別委員会委員の推薦について
工藤理事長より、政策検討・諮問委員会候補者として工藤和俊先生、三宅紀子先生を推薦し、工藤和俊先生が委員として選出されたことが報告された。若手研究者特別委員会候補者として國部雅大先生、横山慶子先生を推薦し、國部雅大先生が委員として選出されたことが報告された。

7．日本体育学会第68回大会参加助成について
他に補助を受けていない大学院生を対象に6名を限度として大会参加助成の希望を募ったところ、7名

からの応募があった。その後1名から演題取り下げに伴う辞退があったため、最終的に6名を採択者とし、助成金1万円を各採択者に支給したことが工藤理事長より報告された。なお、採択者には会報への執筆を今後依頼することとなった。

8．日独スポーツ科学会議講演者推薦について

工藤理事長より、日独スポーツ科学会議講演者として、体育心理学専門領域で1～2名を推薦する依頼が学会本部からあったことが報告された。筆頭として阿江美恵子先生を推薦し、2名を推薦することとなった場合は、工藤和俊先生を推薦する予定であることが報告された。

9．その他

北村理事より、プレセミナーが終了し、10名の参加があったことが報告された。なお、プレセミナーの開催方式（スケジュール）や内容については、学会大会との兼ね合いを考慮しながら、今後検討していく必要があることが議論された。

＜審議事項＞

1．平成29年度補正予算案

工藤理事長より、平成29年度の補正予算案が提示され承認された。学会大会への参加助成やＨＰの管理・充実のための費用に関して増額、外国人招聘やランチョンセミナーに関する費用に関して減額を行った。

2．平成30年度事業案

工藤理事長より、平成30年度事業案が再度提案され承認された。内容は1. 日本体育学会第69回大会の体育心理学専門領域の企画・運営、2. 日本体育学会第69回大会時のプレ／ポスト・セミナーの企画・運営、3. 体育心理学専門領域会報第30号の発行、4. 理事会（4月頃、8月頃）、5. 新旧理事会（8月頃）、6. 総会（8月頃）、7. 平成31～32年度役員選挙であった。

3．平成30年度予算案

工藤理事長より、平成30年度の予算案が提示され承認された。

4．平成29年度総会議事次第

工藤理事長より、平成29年度の総会の議事についての提案があり承認された。

5．会則改正

工藤理事長より、会則改正の提案があり、本会の名称、目的、理事選出方法、重任限度についての文言を変更することが承認された。

6．体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合案について

工藤理事長より、体育心理学専門領域と日本スポーツ心理学会との統合案についての提示があり、議論が行われた。今後、両理事会での話し合いの場を設け、統合案の是非や具体的内容について検討を開始していく方針が確認された。

7．その他

演者依頼の際、正式な依頼文書に関するフォーマットがあれば良いという提案があり、今後検討を行うことが確認された。

2017年度（平成29年度）体育心理学専門領域総会　議事録

2017年（平成29年）9月10日
会場：静岡大学　A103　11:00～12:00

Ⅰ．開会の辞

Ⅱ．会長挨拶

Ⅲ．議長選出
村越真先生（静岡大学）が議長の指名を受け、議長を務めた。

Ⅳ．報告事項
1．平成29・30年度　体育心理学専門領域　理事会役員
平成29・30年度役員の役割を下記のとおりとすることとした。なお、事務局は工藤和俊（東京大学）、國部雅大（筑波大学）、奥村基生（東京学芸大学）が担当することとした。
(1) 任期　平成29年4月1日－平成31年3月31日
(2) 会長　阿江美恵子
(3) 理事　工藤和俊（理事長）
佐々木万丈、菅生貴之、山本裕二（学会大会委員）
北村勝朗、磯貝浩久、東山明子（企画委員）
兄井　彰、荒井弘和、荒木香織（広報委員）
國部雅大、奥村基生（庶務・会計委員）
木島章文、田中美吏（監事）
鈴木啓央（幹事）
2．平成29年度事業について
(1) 理事会（事務局）
第1回理事会を平成29年4月2日(日)10:30～12:20に名古屋大学ES総合館1階ES会議室にて開催した。また、第2回理事会を平成29年9月9日（土）12:00～12:55に静岡大学A102教室にて開催した。
(2) 体育心理学専門領域会報第29号を2017年7月31日付で発行した。(庶務・広報委員会)
(3) 日本体育学会第68回大会における専門領域の活動（学会大会委員会）
静岡大学にて一般発表（口頭発表13、ポスター発表97の計110題)、キーノートレクチャー2つ、シンポジウム1つを開催する。また、プレセミナー1つを開催した。
(4) 会員異動（庶務・会計委員会）
平成29年3月の会員数：668名
平成28年3月の会員数：669名
3．平成29・30年度の体育学研究・IJSHSの編集委員推薦について
体育心理学専門領域から推薦した下記の先生方が編集委員として選出された。
体育学研究編集委員：石倉忠夫先生、上野耕平先生、高見和至先生、田中ゆふ先生、正木宏明先生、
蓑内豊先生
IJSHS編集委員：清水安夫先生、村山孝之先生、山口幸生先生

4．平成 29 年度の学会賞選考委員の推薦
体育心理学専門領域から推薦した杉山佳生先生が委員として選出された。
5．平成 29・30 年度の政策検討・諮問委員会委員の推薦
体育心理学専門領域から推薦した工藤和俊先生が委員として選出された。
6．平成 29・30 年度の若手研究者特別委員会委員の推薦
体育心理学専門領域から推薦した國部雅大先生が委員として選出された。
7．日本体育学会第 69 回大会
日時：平成 30 年 8 月 24 日（金）～ 26 日（日）
場所：徳島大学

V．審議事項
1．平成 28 年度決算（庶務・会計委員会）
平成 28 年度の決算案が工藤理事長より提示され、承認された。
2．平成 29 年度事業計画（事務局）
平成 29 年度の事業計画が工藤理事長より提示され、承認された。
(1) 日本体育学会第 68 回大会の体育心理学専門領域の企画・運営
(2) 日本体育学会第 68 回大会時のプレセミナーの企画・運営
(3) 体育心理学専門領域会報第 29 号の発行
(4) 理事会（4 月、9 月）
(5) 総会（9 月）
3．平成 29 年度予算・補正予算（庶務・会計委員会）
平成 29 年度の予算案・補正予算案が工藤理事長より提示され、承認された。学会大会への参加助成やＨＰの管理・充実のための費用に関して増額、外国人招聘やランチョンセミナーに関する費用に関して減額を行った。
4．平成 30 年度事業計画（事務局）
平成 30 年度の事業計画が工藤理事長より提示され、承認された。
(1) 日本体育学会第 69 回大会の体育心理学専門領域の企画・運営
(2) 日本体育学会第 69 回大会時のプレセミナーの企画・運営
(3) 体育心理学専門領域会報第 30 号の発行
(4) 理事会（4 月頃、8 月）
(5) 新旧理事会（8 月頃）
(6) 総会（8 月頃）
(7) 平成 31 ～ 32 年度役員選挙
5．平成 30 年度予算（庶務・会計委員会）
平成 30 年度の予算案が工藤理事長より提示され、承認された。
6．会則改正について
工藤理事長より、会則改正の提案があり、承認された。
7．スポーツ心理学会との統合案について
工藤理事長より、体育心理学専門領域と日本スポーツ心理学会との統合案についての提示があり、今後

メール等で会員から広く意見を収集しながら、両理事会での話し合いの場を設け、統合案の是非や具体的内容について検討を開始していく方針が確認された。

Ⅵ. 議長退席

Ⅶ. 閉会の辞

平成30年度体育心理学専門領域　第1回理事会　議事録

記録者：國部雅大

日時：平成30年3月31日（土）10:30～12:30
場所：名古屋大学　東山キャンパス　野依学術記念館

出席者：阿江美恵子（会長）、工藤和俊（理事長）
菅生貴之、山本裕二（学会大会委員）
北村勝朗、磯貝浩久、東山明子（企画委員）
兄井　彰、荒井弘和、荒木香織（広報委員）
國部雅大、奥村基生（庶務・会計委員）
木島章文、田中美吏（監事）
鈴木啓央（幹事）
欠席者：佐々木万丈（学会大会委員）（理事：委任状）

挨拶（阿江会長）

＜報告事項＞

1．平成29年度第2回議事録確認、総会議事録確認（事務局）
前回行われた理事会および総会の議事録が確認された。

2．会員の異動（事務局）
國部理事より、昨年度668名から670名へと2名増加していることが報告された。

3．会報第30号（通巻58号）発刊の準備状況（広報委員会、事務局）
國部理事より、第68回大会（静岡大学）関連原稿については、すべて回収済みであることが報告された。研究会活動紹介の原稿については、1件が未回収であり、早急に回収することが報告された。
兄井理事より、学位論文紹介、研究室紹介、海外情報について、会員に対しメイルで原稿執筆者を募集したことが報告された。今後、4月末までに執筆者へ依頼を行い、会報は7月末までに発刊および送付を予定していることが報告された。

4．名誉会員の推薦（事務局）
工藤理事長より、平成31年度の日本体育学会名誉会員の推薦依頼があり、日本体育学会理事会の推薦（役員歴有りの会員が対象）に基づき、体育心理学専門領域所属からは2名を該当者として推薦したと報告された。

5．日独スポーツ会議報告
阿江会長および工藤理事長より、平成30年3月13～15日にドイツ・ミュンスター大学で開催された第10回日独スポーツ科学会議に関する報告があり、体育心理学専門領域から阿江会長と工藤理事長がキーノートレクチャーを行ったことが報告された。次回会議は2年後に日本で開催予定である。

＜審議事項＞

1．平成29年度決算案（事務局）【資料1】

奥村理事より、平成29年度決算案が提示され、会計処理が適正であることが、木島監事、田中監事による会計監査で認められたことが報告された。なお、翌年度への繰越金が多くなった原因として、学会大会での外国人招聘企画が平成29年度中に間に合わなかったことや、ホームページ管理・充実に関する発注は行ったが、予算執行は年度中に間に合わなかったことが説明された。

2．平成30年度事業案・補正事業案（事務局）

工藤理事長より、平成30年度事業案および補正事業案が提示された。新旧理事会および役員選挙を含む従来通りの事業を継続することに加え、専門領域における活動の充実化を図るための事業が提案され、承認された。事業案の内容は、1. 日本体育学会第69回大会の体育心理学専門領域の企画・運営、2. 日本体育学会第69回大会時のプレ/ポストセミナーの企画・運営、3. 体育心理学専門領域会報第30号の発行、4. 理事会（4月頃、8月）、5. 新旧理事会（8月）、6. 総会（8月）、7. 平成31～32年度役員選挙、であった。補正事業案の内容は、8. 体育学会への若手研究者参加支援、9. 研究会活動支援、10. 体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合に関する検討、であった。また、今後先の年度を見据えた事業計画を考えることの必要性に関する提案がなされた。

3．平成30年度予算案・補正予算案（事務局）【資料2】

工藤理事長より、平成30年度予算案および補正予算案が提案された。補正予算案として、収入の部では前年度繰越金および年度会費の増額、代議員選挙発送費の追加、支出の部では会報関連費用（送料、原稿料）の増額、学会大会でのランチョンセミナー代の追加、研究会活動支援費の追加、役員選挙実施費の追加、会議費の増額が提案され、いずれも承認された。研究会活動支援費については、一定の条件を満たす研究会による申請に対し、1件2万円の補助を行うことが了承された。今後、研究会の規模や、参加者に含まれる専門領域会員の割合などの条件を検討の上、会員にメイルで案内し申請を募ることが確認された。補正予算案については、今後総会での承認を受けることとなる。

4．日本体育学会第69回大会企画（学会大会委員会）

工藤理事長より、第69回大会のシンポジウム、キーノートに関する内容及び演者について提案され、了承された。外国人研究者招聘を含む国際シンポジウムについては「共に歩き、共に笑う：協調と共感のダイナミクス（Walking together, laughing together: coordination, sympathy, and interpersonal dynamics）」をテーマとし、演者への打診を行ったことが報告された。なお、当初は外国人研究者招聘の予算に基づき1名を招聘する予定であったが、外国人研究者側で1名分の旅費を出すことが可能であるため、計2名の外国人研究者に演者を依頼する予定であることが報告された。今後、通訳の方法や時間配分を含めた企画の詳細を確定していくことが確認された。キーノートについては、2名の演者に依頼することが了承された。司会者の選定については学会大会委員会に一任することが確認された。今後、期限に間に合うよう、和文および英文の講演タイトルを学会本部に提出することが確認された。

工藤理事長より、第69回大会のランチョンセミナー開催に関する提案があり、内容および日程について検討が行われた。その結果、内容については（1）国際シンポジウムの続きの議論と（2）大会主管校企画の2案が挙げられた。今後、日程（8月24日、25日）およびセミナー内容に関して、準備日程や会場の都合を確認の上確定していくことが確認された。

5．第69回大会の専門領域プレセミナー（企画委員会）

北村理事、東山理事、磯貝理事より、第69回大会の前日に行われる専門領域プレセミナーについて提案され、了承された。内容は「阿波おどり「踊る阿呆に見る阿呆」の心から研究デザインを探る」であり、講師の選定については今後検討することが確認された。会員への案内に関しては、会報への同封およびメイルにより行うことが確認された。

6．体育心理学専門領域・スポーツ心理学会統合検討ワーキンググループの設立について

工藤理事長より、体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合に関するワーキンググループの設立について提案があり、体育心理学専門領域からは、阿江会長、事務局、学会大会委員会委員長の佐々木理事をワーキンググループのメンバーとして選出することが了承された。

7．平成31・32年度役員選挙（事務局）

國部理事より、平成31・32年度役員選挙について方法および資料の書き方について提案され、了承された。昨年度行われた会則の変更に伴い、役員の重任に関する記載内容が変更されたことが確認された。

平成29年度決算報告

資料１

平成29年度決算報告（自 平成29年4月　至 平成30年 3月）

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計（A）		1,485,100	1,435,104	49,996
前期繰越収支差額		811,744	1,032,359	△ 220,615
収入合計（B）		2,296,844	2,467,463	△ 170,619
支出の部				
当期支出合計（C）		1,666,000	1,098,697	567,303
次期繰越収支差額（B）－（C）		630,844	1,368,766	△ 737,922
支出合計		2,296,844	2,467,463	△ 170,619

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・前年度繰越金		811,744	1,032,359	△ 220,615	
・年度会費		1,338,000	1,290,000	48,000	2千円×645名（3月20日現在）
・郵便貯金（利息）		100	1	99	
・体育学会専門領域補助金		147,000	145,103	1,897	
・平成31・32年度代議員選挙発送費		0	0	0	
○収入合計（B）		2,296,844	2,467,463	△ 170,619	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	501,000	523,980	△ 22,980	第29号発行および第30号作成
	印刷費	240,000	238,140	1,860	第29号
	会報送料	56,000	105,840	△ 49,840	第29号
	原稿料	165,000	180,000	△ 15,000	第30号（27名）
	会報送付用封筒代	20,000	0	20,000	
	謝礼（会報発行作業補助）	20,000	0	20,000	
・学会大会関連経費	小計	500,000	81,156	418,844	第68回大会
	司会・演者謝礼	100,000	13,256	86,744	講師会員のためプレー代のみ
	会員外交通費補助	30,000	7,900	22,100	
	外国人招聘	300,000	0	300,000	
	ランチョンセミナー代	0	0	0	
	大学院生学会参加助成	70,000	60,000	10,000	
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・平成31・32年度役員選挙実施費	郵送費，色紙代，文具等	0	0	0	
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当代等	50,000	29,622	20,378	
・会議費	理事会，委員会開催等費用	250,000	263,184	△ 13,184	旅費交通費・弁当代等
・広報費	HPの管理・充実のための費用	470,000	0	470,000	発注済み，未払い
・通信費	会員・理事連絡費	5,000	755	4,245	
・当期支出合計（C）		1,976,000	1,098,697	877,303	
・予備費（B）-（C）		320,844	1,368,766	△ 1,047,922	
○支出合計		2,296,844	2,467,463	△ 170,619	

△は超過

平成29年度特別会計決算報告（自 平成29年4月　至 平成30年 3月）

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計（A）	平成29年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
郵便貯金（利息）		100	5	95
前期繰越収支差額		600,100	600,002	98
収入合計（B）		800,200	800,007	193
支出の部				
当期支出合計（C）		0	0	0
次期繰越収支差額（B）－（C）		800,200	800,007	193
支出合計		800,200	800,007	193

*会員数昨年度668名から670名へと2名増（平成30年3月20日現在）

平成30年　3月　31日
この決算書は適正であることを認めます．

監事　木島章文　田中美吏

平成30年度補正予算案

資料２

平成30年度予算案（自 平成30年4月　至 平成31年 3月）

○収入の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・前年度繰越金		630,844	1,368,766	△ 737,922	前年度分支払い含む
・年度会費		1,338,000	1,340,000	△ 2,000	2千円×670名
・郵便貯金（利息）		100	1	99	
・体育学会専門領域補助金		147,000	145,103	1,897	
・平成31・32年度代議員選挙発送費		0	78,720	△ 78,720	
・当期収入合計（A）		1,485,100	1,563,824	△ 78,724	
○収入合計（B）		2,115,944	2,932,590	△ 816,646	

○支出の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	501,000	550,000	△ 49,000	第30号発行および第31号作成
	印刷費	240,000	240,000	0	
	会報送料	56,000	110,000	△ 54,000	
	原稿料	165,000	180,000	△ 15,000	
	会報送付用封筒代	20,000	0	20,000	
	謝礼（会報発行作業補助）	20,000	20,000	0	
・学会大会関連経費	小計	500,000	560,000	△ 60,000	第69回大会
	司会・演者謝礼	100,000	100,000	0	
	会員外交通費補助	30,000	30,000	0	非会員・専門領域非会員対象
	外国人招聘	300,000	300,000	0	
	ランチョンセミナー代	0	60,000	△ 60,000	昼食代
	大学院生学会参加助成	70,000	70,000	0	
・研究会活動支援費	研究会活動の支援	0	100,000	△ 100,000	
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	郵送費，色紙代，文具等	0	100,000	△ 100,000	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会，委員会開催費用	250,000	320,000	△ 70,000	旅費交通費・弁当代等
・広報費	HPの管理・充実のための費用	470,000	400,000	70,000	前年度分支払い含む
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・当期支出合計（C）		1,976,000	2,285,000	△ 309,000	
・予備費（B）－（C）		139,944	647,590	△ 507,646	
○支出合計		2,115,944	2,932,590	△ 816,646	

△は超過

平成30年度特別会計予算案（自 平成30年4月　至 平成31年 3月）

○収入の部

款	項目	前年度予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		800,200	800,007	193	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金（利息）		100	5	95	
・当期収入合計（A）		200,100	200,005	95	
○収入合計（B）		1,000,300	1,000,012	288	

○支出の部

款	年度	前年度予算	予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計（C）		0	0	0	
・予備費（B）－（C）		1,000,300	1,000,012	288	
○支出合計		1,000,300	1,000,012	288	

△は超過

編集後記

体育心理学専門領域会報第30号（通巻58号）をお届けいたします。今回も、事務局のご尽力をいただき、無事に発刊することができました。感謝いたします。

昨年度から研究室紹介、学位論文紹介及び海外情報については、事務局から会員のみなさまにメールでご案内を差し上げ、執筆者の候補を募り、執筆依頼を差し上げる手続きを取らせていただいております。今年度も多くの方々に原稿を書いていただくことが出来ました。深く感謝いたします。おそらくこれからもこの手続きで原稿執筆をしていただくこととなると思います。会員のみなさまには、今後ともよろしくお願いいたします。

この編集後記の原稿を執筆している時期に、大学スポーツ界を大きく揺るがす悪質タックルの問題が起こりました。スポーツマンシップやフェアプレイに則ってプレイすることの大切さを知らない指導者や教師は、いないと思われます。それでも今回の件を含めて、スポーツマンシップを逸脱した事件やアンフェアな問題が次々と浮上しています。これはもしかするとスポーツマンシップやフェアプレイが単なるお題目となり、その本当の意味や価値について深く理解されていないためではないでしょうか。スポーツを楽しむためには、プレイヤー同士も、コーチも、審判も、観客も、スポーツに関わる全ての人が、互いに尊重しあい、より良くあるというWin-Winの関係を築くことが大切です。しかし、実際には、どちらかが良くて、どちらかが悪いと言ったアンフェアな関係が成立してしまいがちです。それを乗り越え、スポーツや運動を心から楽しみ、互いに良かったと思えるための知恵として、スポーツマンシップがあると思います。

このようなスポーツマンシップやフェアプレイについて、人々がどのように捉え、行動しようとしているかなどを研究し、スポーツか抱える闇の部分にどのように対応すればよいかを探求して行くことがこれからもっと必要だと思われます。また、これまでに蓄積された体育心理学的知見も活用して、スポーツ実践の場に良き提案が出来るのではないかと思われます。

広報委員会委員長　兄井　彰

日本体育学会体育心理学専門領域会報　第30号（通巻第58号）

発　　行　　平成30年 7 月20日　発行（非売品）
発行責任者　　工藤　和俊（代表）
発 行 所　　日本体育学会体育心理学専門領域事務局
〒153-8902　東京都目黒区駒場 3－8－1
東京大学大学院総合文化研究科
TEL：03-5454-6854　　FAX：03-5454-4317
E-mail：taiiku_shinri@idaten.c.u-tokyo.ac.jp
URL：http://www.dexterity-lab.c.u-tokyo.ac.jp/
psychology_of_physical_education.html

印　　刷　　株式会社コームラ